

# 大林A遺跡発掘調査報告書

2015

下呂市教育委員会



# 大林 A 遺跡発掘調査報告書

2015

下呂市教育委員会





大林A遺跡出土石器



大林A遺跡出土石核



## 序

大林遺跡群は旧石器時代の遺跡として、古くから知られていた遺跡です。湯ヶ峰を背後に控える大林遺跡群は、「下呂石」を使った石器作りの村として、多くの地元の方々の興味の対象であり、現在も、「下呂石」を使った多様な公開活動が市内で実施されています。

大林遺跡群では、これまで飛騨考古学会が中心になり丹念な表採活動が実施されています。その結果、広範囲に「下呂石」の石器が分布していることが判明し、現在、下呂市では保護すべき貴重な遺跡として位置付けています。本報告書は平成 22 年度に実施した大林 A 遺跡の発掘調査をまとめたものです。

今回の調査では、100 m<sup>2</sup>という狭い範囲から約 1,800 点の「下呂石」製の石器や剥片が出土し、約 2 万年前を超える下呂市内最古の石器群として大変注目されました。本報告書が埋蔵文化財への認識を深めて頂くきっかけになり、また当地の歴史研究の一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成にあたりまして、多大なご協力・ご支援を賜りました土地地権者の皆様、地元地区の皆様、並びに関係諸機関の皆様に深く御礼申し上げます。

平成 27 年 2 月

下呂市教育委員会

教育長 大屋 哲治

## 例　　言

- 1 本書は、岐阜県下呂市小川字袖垣内 580 番地 1 地内に所在する大林遺跡 A 地点（岐阜県遺跡番号 21220-1059）の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、個人住宅建設に先立つ緊急発掘調査で、下呂市教育委員会が発掘調査及び整理作業を実施した。
- 3 試掘確認調査を平成 21 年度に、本発掘調査を平成 22 年度に、整理作業を平成 23・24・25 年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の体制は第 1 章に示した。
- 5 本書の執筆は馬場伸一郎が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量の一部を株式会社イビソクに委託して行った。また、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金を発掘調査・整理作業費用に充てた。
- 7 出土遺物の実測と写真撮影を株式会社イビソクに、巻頭写真撮影と報告書編集作業を有限会社毛野考古学研究所に委託して行った。
- 8 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力を頂いた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。  
岩田修 須藤隆司 後藤信幸 谷和隆 堤隆 長屋幸二 吉朝則富  
岐阜県教育委員会社会教育文化課 飛騨市教育委員会

- 9 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第 VII 系を使用する。
- 10 土層の色調等は、小山正忠・竹原秀雄 2004『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 11 出土石器の事実記載にあたって、その計測方法及び専門用語は竹岡俊樹 1989『石器研究法』（言叢社）39 頁～47 頁・92 頁～147 頁に概ね準拠した。
- 12 遺物写真図版の縮尺は、図版 4 から図版 13 は概ね 3/4、図版 14 から図版 17 が概ね 2/3、図版 18 が概ね 1/2 である。
- 13 調査記録及び出土遺物は下呂市教育委員会で保管している。

# 目 次

巻頭図版

序

例言

目次

第1章 調査の経緯 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の方法と経過 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境 .....	4
第1節 地理的環境 .....	4
第2節 歴史的環境 .....	4
第3章 調査の成果 .....	7
第1節 本発掘調査に向けて .....	7
第2節 基本層序 .....	9
第3節 石器の器種分類 .....	9
第4節 遺物 .....	14
第4章 総括 .....	57
第1節 出土石器群の年代的な位置づけについて .....	57
第2節 大林遺跡群における大林A遺跡の位置づけ .....	61

写真図版

抄録

奥付

## 挿図目次

第1図	大林A遺跡試掘トレンチ及び本調査位置図	1
第2図	大林A遺跡現況地形測量図	3
第3図	大林A遺跡とその周辺の遺跡分布図	6
第4図	大林A遺跡調査区平面図	8
第5図	大林A遺跡土層断面図	10
第6図	大林A遺跡遺物ドット図	11
第7図	大林A遺跡遺物接合図	12
第8図	大林A遺跡出土石器①	15
第9図	大林A遺跡出土石器②	16
第10図	大林A遺跡出土石器③	17
第11図	大林A遺跡出土石器④	18
第12図	大林A遺跡出土石器⑤	20
第13図	大林A遺跡出土石器⑥	21
第14図	大林A遺跡出土石器⑦	22
第15図	大林A遺跡出土石器⑧	24
第16図	大林A遺跡出土石器⑨	25
第17図	大林A遺跡出土石器⑩	26
第18図	大林A遺跡出土石器⑪	28
第19図	大林A遺跡出土石器⑫	29
第20図	大林A遺跡出土石器⑬	30
第21図	大林A遺跡出土石器⑭	31
第22図	大林A遺跡出土石器⑮	32
第23図	大林A遺跡出土石器⑯	34
第24図	大林A遺跡出土石器⑰	35
第25図	大林A遺跡出土石器⑱	36
第26図	大林A遺跡出土石器⑲	37
第27図	大林A遺跡出土石器⑳	38
第28図	大林A遺跡出土石器㉑	39
第29図	大林A遺跡出土石器㉒	40
第30図	大林A遺跡出土石器㉓	42
第31図	大林A遺跡出土石器㉔	43
第32図	大林A遺跡ナイフ形石器第1類・第2類	58
第33図	大林A遺跡ナイフ形石器第3類	59
第34図	大林A遺跡ナイフ形石器第4類・第5類・ 類角錐状石器	60
第35図	大林遺跡群と発掘調査地点の概要	62

## 表目次

第1表	調査体制	2
第2表	大林A遺跡出土遺物観察表①	43
第3表	大林A遺跡出土遺物観察表②	44
第4表	大林A遺跡出土遺物観察表③	45
第5表	大林A遺跡出土遺物観察表④	46
第6表	大林A遺跡出土遺物観察表⑤	47
第7表	大林A遺跡出土遺物観察表⑥	48
第8表	大林A遺跡出土遺物観察表⑦	49
第9表	大林A遺跡出土遺物観察表⑧	50
第10表	大林A遺跡出土遺物観察表⑨	51
第11表	大林A遺跡出土遺物観察表⑩	52
第12表	大林A遺跡出土遺物観察表⑪	53
第13表	大林A遺跡出土遺物観察表⑫	54
第14表	大林A遺跡出土遺物観察表⑬	55

## 写真図版目次

### 巻頭図版

図版1	発掘開始時 南東部調査区掘削中 南東部調査地山掘削 北西部調査区A-A'面 南東部調査区A-A'面 北西部調査区A-A'面拡大 北西部調査区B-B'面 北西部調査区B-B'面拡大
図版2	北西部調査区掘削① 北西部調査区掘削② 北西部調査区掘削③ 南東部調査区遺物出土状況 北西部調査区遺物出土状況① 北西部調査区遺物出土状況② 北西部調査区遺物出土状況③ 北西部調査区遺物出土状況④
図版3	南東部調査区完了① 南東部調査区完了② 南東部調査区完了③

### 北西部調査区完了①

### 北西部調査区完了②

### 発掘調査区埋戻し作業

### 発掘調査区埋戻し完了

### 出土遺物指導風景

図版4	出土石器①表
図版5	出土石器①裏
図版6	出土石器②表
図版7	出土石器②裏
図版8	出土石器③表
図版9	出土石器③裏
図版10	出土石器④表
図版11	出土石器④裏
図版12	出土石器⑤表
図版13	出土石器⑤裏
図版14	出土石器⑥
図版15	出土石器⑦
図版16	出土石器⑧
図版17	出土石器⑨
図版18	出土石器⑩

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査地点である下呂市小川字袖垣内 580 番地 1 は、一帯を「大林」と呼び、古くから先史時代人の石器石材として用いられた下呂石が採取できる地点として知られている。「大林」一帯は、飛騨考古学会（旧高山考古学研究会）による丹念な出土品採集調査の結果を受けて、大林遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地となっており、中でも採集が集中する地点として、A 地点からD 地点の設定がなされている（吉朝 2005b）。

平成 21 年度に、A 地点から約 30m 東の箇所で個人住宅建設が予定されたため、予定地の土層堆積状況と遺物の遺存状況を把握する目的で、平成 21 年 10 月 15 日から 17 日に試掘確認調査を実施した。個人住宅建設は、良好な遺物包含層が検出された試掘調査第 2 トレンチ（2 T）から第 3 トレンチ（3 T）にかかる約 100 m<sup>2</sup>が予定され、地権者と協議を実施した結果、建設工事内容の変更は困難であるため、本発掘調査による記録保存措置にて対応することに決定した。

平成 21 年 12 月 22 日付け社教第 184 号で、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定による「埋蔵文化財発掘の届出について」が地権者から下呂市教育委員会を経由して岐阜県教育委員会に進達され、個人住宅建設範囲約 100 m<sup>2</sup>について岐阜県教育委員会から本発掘調査実施の指導を受けた。また、平成 22 年 9 月 15 日付け社教第 151 号で、文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の報告について」が下呂市教育委員会から岐阜県教育委員会に提出され、9 月 16 日に本発掘調査を開始するに至った。本書は、以上の経緯を受けて平成 22 年度に実施した本発掘調査の記録である。



第1図 大林 A 遺跡試掘トレンチ及び本調査位置図

## 第2節 調査の方法と経過

### 1. 調査の方法

発掘調査は約 100 m<sup>2</sup>を対象に実施した。

表土剥ぎは重機を用いて行い、遺物包含層検出後はねじり鎌と根切り鉄を用いて人力で慎重に掘削を行った。遺物包含層中出土の遺物については、出土位置の座標を記録した。

遺構平面図の作成は、三次元測量・図化システムにより行ったが、断面図は手測りにより実施した。図面の縮尺は 20 分の 1 を基本とした。

調査区全体図は、三次元測量・図化システムにより作図した。

写真撮影は、一眼レフデジタルカメラ (Pentax K200) を使用して撮影した。

### 2. 調査経過

本発掘調査は平成 22 年 9 月 16 日に開始し、平成 22 年 10 月 15 日に完了した。発掘調査は、下呂市教育委員会社会教育課の細江真理（当時）が担当した。表土鋤き取りは 9 月 17 日に実施し、以後、遺物包含層の掘削を人力で実施し、出土する遺物は極力、全点位置情報を記録することに努めた。位置情報の記録では、(株)イビソクの支援を受け、トータルステーションによる三次元測量を実施した。10 月 14 日に遺物包含層の掘削を完了し、10 月 15 日に重機により埋め戻しを行い、調査を完了した。

### 3. 整理等作業と報告書作成

出土遺物整理作業と報告書作成作業は、下呂ふるさと歴史記念館（下呂市森 1808-37）及び下呂市教育委員会社会教育課（当時、同萩原町萩原 1166-8）にて行った。一次整理（遺物洗浄・注記・接合）は（株）上智に委託して平成 23 年 1 月 10 日から同 3 月 10 日まで実施した。二次整理（遺物実測）は、遺物実測を（株）イビソクに委託して平成 23 年 10 月 18 日から平成 24 年 2 月 29 日まで行い、遺物計測を（有）毛野考古学研究所に委託して平成 23 年 12 月 28 日から平成 24 年 3 月 15 日まで行った。

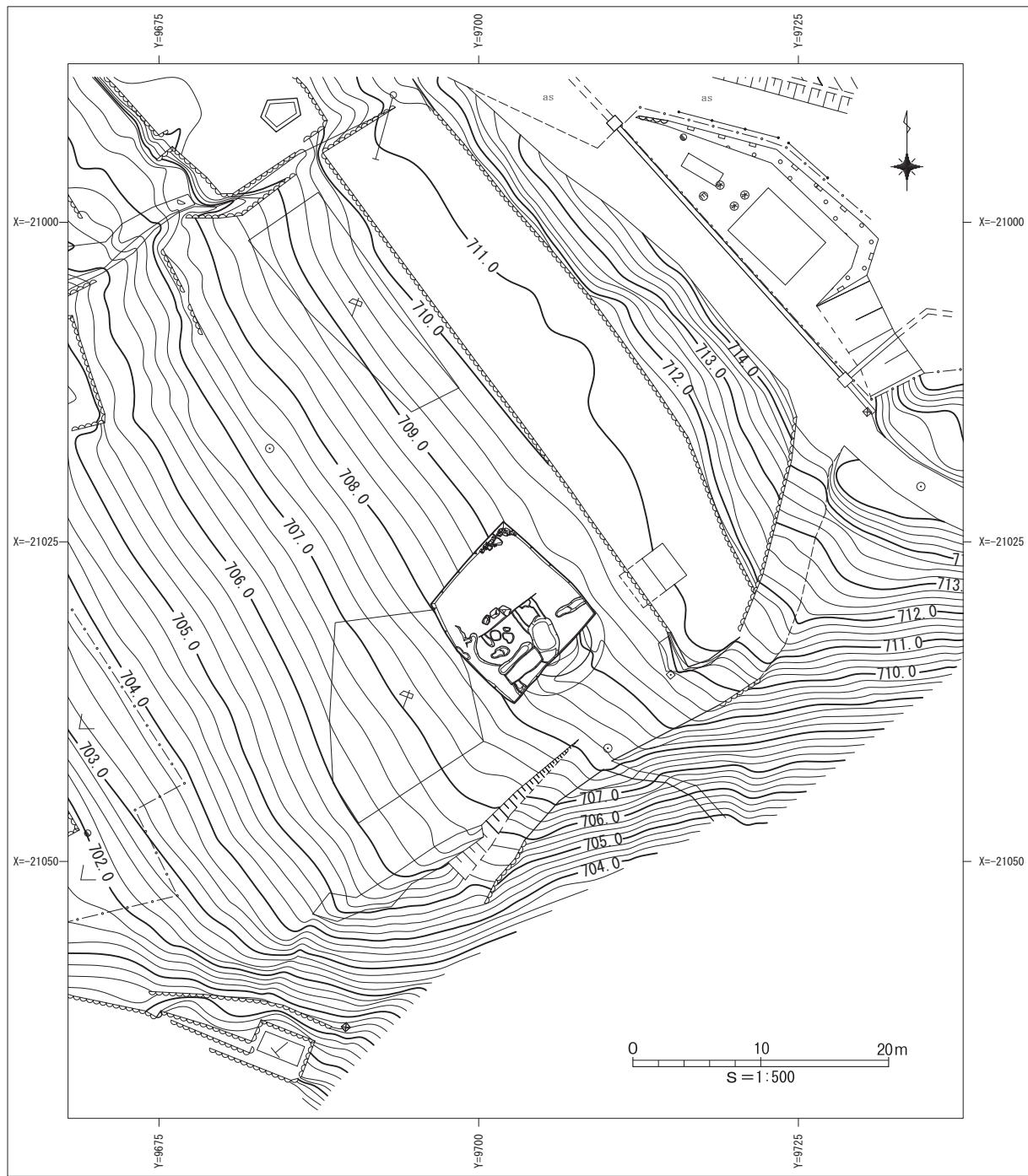
平成 24 年 3 月 25 日に美濃考古学研究会の後藤信幸氏、岐阜県博物館の長屋幸二氏、飛騨考古学会の吉朝則富氏より、また平成 25 年 2 月 5 日から 2 月 6 日に長野県埋蔵文化財センターの谷和隆氏、佐久市教育委員会の須藤隆司氏、御代田町教育委員会の堤隆氏より出土石器群について指導を受けた。平成 25 年度に報告書原稿を執筆し、（有）毛野考古学研究所に DTP 編集を委託した。

### 4. 調査体制

発掘調査から整理等作業は下記の体制で実施した。

第1表 調査体制

職名	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
教育長	長谷川藤三	長谷川藤三	長谷川藤三	長谷川藤三	長谷川藤三
教育部長	岩佐正彦	池戸 昇	池戸 昇	今井能和	今井能和
社会教育課長	中川好美	中川好美	山中昌弘	山中昌弘	山中昌弘
事務局	細江和子 上野 晃 細江真理	船坂 勉 熊崎一彦 馬場伸一郎	熊崎 浩 馬場伸一郎	熊崎 浩 松井智之	熊崎 浩 松井智之
調査担当	馬場伸一郎 (試掘確認)	細江真理 (発掘調査)	細江真理 (整理)	馬場伸一郎 (報告書作成)	馬場伸一郎 (報告書作成)



第2図 大林A遺跡現況地形測量図

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

大林A遺跡は、標高 1066.8m の湯ヶ峰西麓の山中に位置する。大林遺跡と湯ヶ峰の間には小川谷が存在し、大林遺跡の周囲は、北東から南西に向かってなだらかな緩斜面地形が連続する。大林A遺跡を含む大林遺跡群は、標高 630m から 710m 付近の緩斜面に合計 6 遺跡が確認されている。

湯ヶ峰周辺には数か所で断層が確認されており、断層活動の結果、断崖・窪地・河川が形成されたといわれる。湯ヶ峰流紋岩は、その噴出源こそ未発見であるが、露頭状況の確認調査の結果、湯ヶ峰周辺の断層活動が引き金になって、断層の弱線に沿って噴出したものと推定されており、その湯ヶ峰流紋岩の溶岩流は、下呂市乗政の長洞谷側から下呂市大林の小川谷に向かって流れたと考えられている（岩田・石原 1988）。

さて、湯ヶ峰一帯に確認されている湯ヶ峰流紋岩には、黒色ガラス質流紋岩である「下呂石」と、多孔質灰色から淡赤色流紋岩の「小川石」がある（岩田 1995）。崖錐性堆積物が段丘上の地形を形成する本遺跡一帯では、その基盤層（地山）に小川石の大小角礫が大量に含まれていた。

本遺跡は、二次的堆積の下呂石採取地点が至近にあり、また湯ヶ峰周囲に確認されている下呂石の露頭へもアクセスが可能である。居住地に適するゆるやかな斜面地と、湯ヶ峰周囲から産出する豊富な下呂石、その二つが本遺跡の地理的特質といえる。

### 第2節 歴史的環境

大林遺跡の南方にある湯ヶ峰は、主に旧石器時代・縄文時代の石器石材として多用される湯ヶ峰流紋岩（通称「下呂石」）を産出する山として著名である。湯ヶ峰周囲には、南側から南西側にかけての山麓に大林遺跡・初矢遺跡・峰一合遺跡・上ヶ平遺跡がある。大林・初矢の両遺跡は旧石器時代、峰一合・上ヶ平の両遺跡は縄文時代の遺跡として知られる。また、南東側の山麓には、竹原川に注ぐ乗政川沿いまたはその支流の河岸段丘上に、三ッ石遺跡や下島遺跡といった縄文時代の遺跡が確認されている。特に下島遺跡では縄文晚期の良好な土器群や、弥生中期の内垣内式甕の出土とともに、コンテナにして数十箱の下呂石製石器が出土しており、原産地付近の遺跡として注目される。

さて、大林遺跡は当初縄文時代の遺跡として遺跡地図に登録されていた。大林遺跡 A 地点（第 35 図参照）と呼ばれる場所にて 1981 年（昭和 56 年）に遺物採集がなされたのを嚆矢に、1995 年（平成 7 年）に飛騨考古学会が国府型ナイフ形石器・彫器・翼状剥片・盤状剥片といった旧石器時代資料を 180 点採集した（飛騨考古学会 1995）。以後、同地点での採集量は増加し、これまで 500 点余りに達している（井上 2001；吉朝 2005a, b）。特に、同地点のナイフ形石器は、翼状剥片素材の国府型ナイフ形石器が極めて少なく、大振りの分厚い縦長剥片を素材とするナイフ形石器の存在が目立つ（永塚 2011）。A 地点は、後述する大林遺跡 C 地点・D 地点と対照的な石器群構成である点が注目され、大林遺跡内で最古の石器群が出土する地点として注目されている。

次に、大林遺跡 C 地点は、1998 年（平成 10 年）に飛騨考古学会により設定された地点である。大形・

中形の槍先形尖頭器 20 点余りを採集・発見し、注目された（吉朝 1999）。また、地元住民により 18 点の槍先形尖頭器が採集された地点を大林遺跡D地点として設定した（吉朝 2008）。

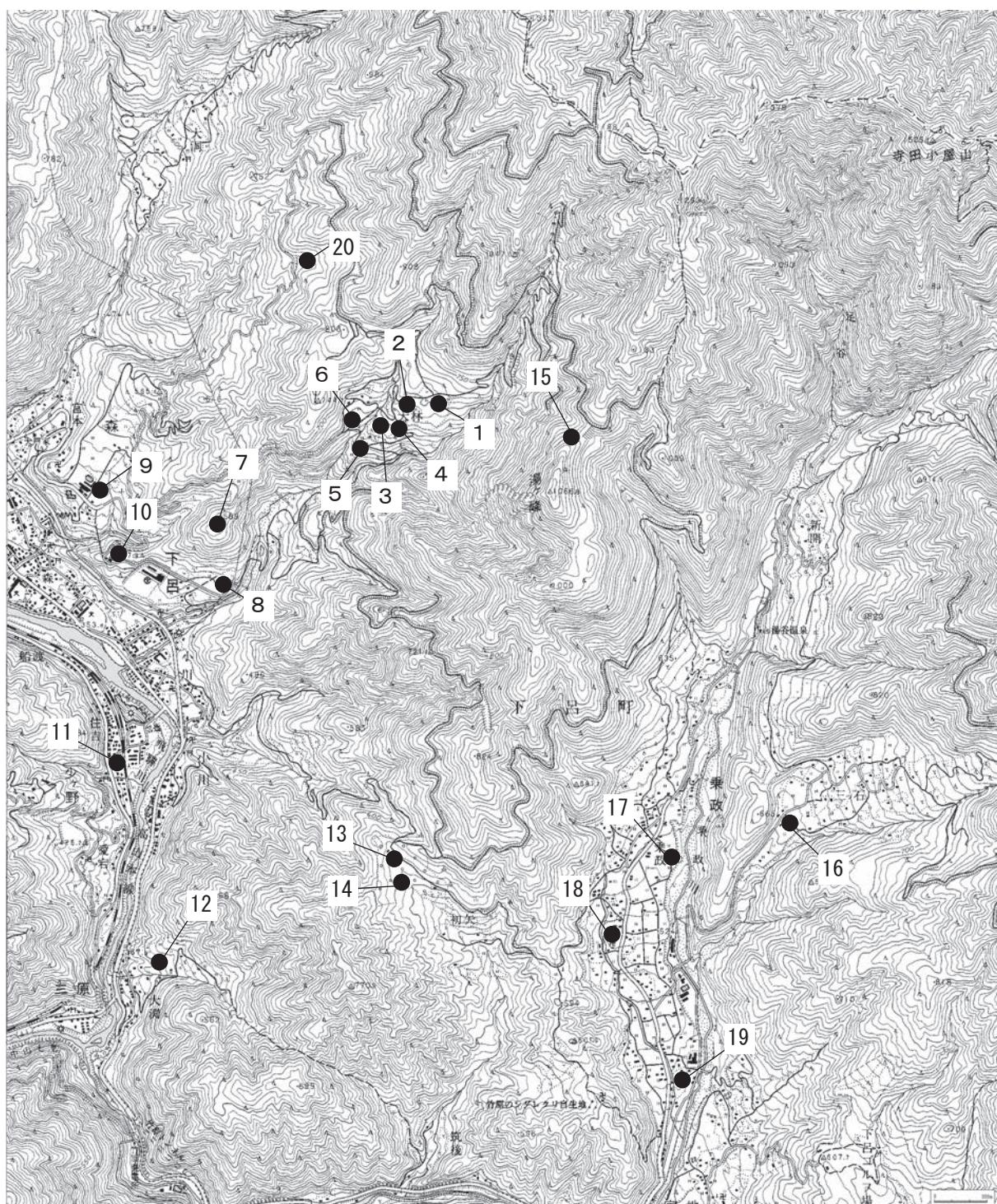
このように、大林遺跡内での精力的な分布調査により、旧石器時代にまで遡る大林遺跡の石器群構成が明らかになりつつある中で、下呂町教育委員会（当時）では同地の圃場整備計画に伴う試掘調査を 2001 年（平成 13 年）7 月 23 日から 10 月 30 日まで実施した。試掘調査の範囲は大林遺跡 A 地点下から同 D 地点上までの東西幅約 250m、南北幅約 70m というこれまでにない広大な範囲で実施された。試掘調査では、設定した試掘坑内で遺物包含層を点検し、必要に応じて試掘坑を拡張し、遺物包含層の広がりを確認していく手法が採用された。

試掘調査の結果、特に K6 トレンチと N8 トレンチの 2ヶ所で良好な石器群が出土した（第 35 図参照）。K6 トレンチは、第 1 層表土層（H 層）、第 2 層黒色土層（C 層）、第 3 層淡褐色土層（T 層）、第 4 層黄色土層（O 層）の 4 層に分層され、第 3 層の淡褐色土層が遺物包含層であり、遺物包含層の一部は地山である黄色土層にも及ぶと報告された。K6 トレンチからは、槍先形尖頭器及びその未成品の他、搔器や削器の剥片石器、剥片、そして敲石が合計 2,444 点出土し、試掘トレンチ全体の 1/3 を占める遺物の出土量があった。報告した吉田英敏氏は、K6 トレンチで槍先形尖頭器製作時に生じる特徴的な剥片が目立つこと、また有舌（有茎）尖頭器の破片の出土があったことから、K6 トレンチの時期を縄文時代草創期と考えた（吉田 2002）。

一方、N8 トレンチの土層堆積は K6 トレンチと同様だが、N8 トレンチの石器群には K6 トレンチに認められない石刃（状の）石核があり、また石刃を含む縦長剥片が目立った。また、同トレンチでは、接合関係が復元できる石刃およびその石核が出土した。このように、K6 トレンチと N8 トレンチに石器群構成の違いを認め、また、双方のトレンチに年代差がある手がかりを得ることができた。

以上までの考古学的調査により、大林遺跡は旧石器時代から縄文時代草創期を中心とする遺跡であること、そしてナイフ形石器群主体から槍先形尖頭器石器群主体の時期までの時間幅が認められること、また「湯ヶ峰流紋岩（通称「下呂石」）」を産出する湯ヶ峰山麓の原産地遺跡であることが判明した。

下呂市では、平成 24 年度に実施した遺跡詳細分布調査時に、下呂町教育委員会（当時）の試掘調査成果を踏まえ、飛騨考古学会が設定した A から D までの各地点を含む範囲を、それぞれ大林 A 遺跡から大林 D 遺跡とした。また、新たに遺物が集中して採取できる 2 地点 E・F を遺跡として登録した。現在、「大林」には、A から F までの 6 遺跡が確認され、その総称として以後「大林遺跡群」と呼称することにする。



- 1 : 大林A遺跡（旧石器） 2 : 大林B遺跡（旧石器） 3 : 大林C遺跡（旧石器・縄文）
- 4 : 大林D遺跡（旧石器） 5 : 大林E遺跡（旧石器） 6 : 大林F遺跡（旧石器）
- 7 : 下呂森城跡（中世） 8 : 高洞遺跡（縄文） 9 : 上ヶ平遺跡（縄文・弥生・平安）
- 10 : 峰一合遺跡（縄文・弥生） 11 : 少ヶ野遺跡（縄文） 12 : 大渕遺跡（縄文）
- 13 : 初矢遺跡（旧石器・縄文） 14 : 初矢峠の石畳（近世） 15 : 湯ヶ峰No. 1遺跡（旧石器）
- 16 : 三ッ石遺跡（縄文） 17 : 乗政城跡（中世） 18 : 山口遺跡（縄文） 19 : 下島遺跡（縄文・弥生）
- 20 : 下シヤ遺跡（縄文）

第3図 大林A遺跡とその周辺の遺跡分布図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 本発掘調査に向けて

調査当初、周知の埋蔵文化財包蔵地である大林遺跡の範囲が限定的であったため、まず個人住宅建設予定地一帯で試掘確認調査を実施し、保護すべき遺跡の範囲の有無を確認した。試掘トレンチは、下呂市小川字袖垣内 580 番地 1 地内にて、緩斜面の等高線に直交するように、長さ 8m、幅 2m 程度の 5 本の試掘トレンチ（1 T から 5 T）を設定。重機により第 1 層・10YR3/2 黒褐色粘質土層の鋤き取り後、人力により地山まで精査を行った。その結果、いずれの試掘トレンチでも地表面から 50cm から 70cm 程で、地山である第 3 層・10YR6/6 明黄褐色粘質土層に達した。最も北側にある 1 T では遺物の出土は皆無であったが、北から南にかけて設定した 2 T から 3 T では、地山の直上層である第 2 層・10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土層から地山層にかけて多数の下呂石製石器が出土した。また、4 T・5 T は、搅乱が地山付近にまで及び、遺物包含層の遺存状態は良好でないことを確認した。

試掘確認調査の結果を受け、個人住宅建設に伴う工事範囲約 100 m<sup>2</sup>の地下の一部に良好な埋蔵文化財包含層が存在することを確認したため、工事範囲全面を本発掘調査の対象とした。なお、本発掘調査の範囲が狭いため、グリッドの設定はせず、また排出土置き場を設ける都合、調査区を「北西部調査区」と「南東部調査区」の 2 つに分け、順次調査を実施した。

表土掘削については、試掘確認調査の段階で第 1 層・10YR3/2 黒褐色粘質土層にも縄文時代の遺物が含まれる可能性があったため、地表面から 20cm 程を対象に重機で鋤き取りを行い、以後はスコップ・ジョレン・ねじり鎌・根切り鉄等を用いて人力で掘り下げた。掘り下げは、第 3 層・10YR6/6 明黄褐色粘質土層の上面まで行った。



試掘調査前



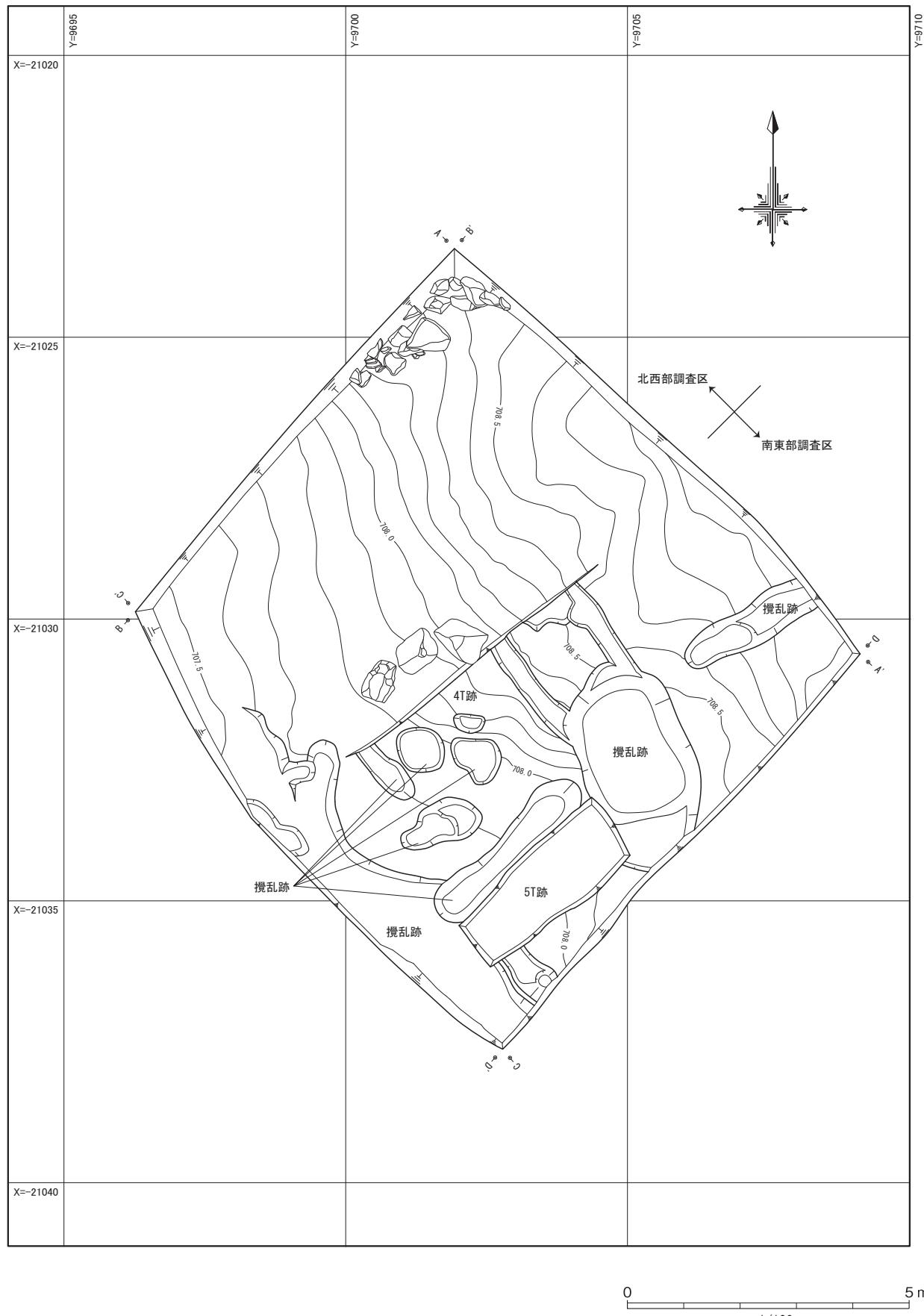
試掘調査（3 T）



試掘調査（4 T）



試掘調査（5 T）



第4図 大林A遺跡調査区平面図

遺物包含層の掘削では、スコップ・ジョレン・ねじり鎌・根切り鉄等を用いて人力で掘り下げた。遺物の取り上げについては、表土重機掘削後の人による掘り下げ以降、原則、原位置での取り上げを行い、トータルステーションによる三次元座標の測定を行った。座標情報はNo.1からNo.1124まで記録した。

## 第2節 基本層序

調査範囲は植林により覆われていた一帯であり、人為的な地形改変は少ないと考えられる。発掘調査の結果、調査範囲内の層序はほぼ一様であったが、調査区の南東側半分は攪乱が地山近くにまで及び、良好な層序ではなかった。ここでは状態が良好であった調査区B-B'ラインの土層断面を基本層序として、以下、説明する。

第1層は10YR3/2黒褐色粘質土層で、礫をほとんど含まない。第1層では、下呂石製の石器が見られるものの、現代品も伴っている。第2層は10YR4/3にぶい黄褐色粘質土層である。第1層と、下層に続く第3層の漸移層に相当する。拳大の角礫を1%程度含む層であり、特に第2層から第3層上部で下呂石製石器の出土が頻繁に認められた。第3層は10YR6/6明黄褐色粘質土層で、地山層である。拳大から人頭大の小川石の角礫を少ない箇所では5%程度、多い場所では15%程度含むことがあった。

なお、2002年報告（吉田2002）の大林遺跡の試掘調査で確認された土層と本調査の土層を対応させると、H層とC層が本調査の第1層、T層が第2層、0層が第3層に対応できる。2002年報告で、特に下呂石製石器の出土が際立っていたT層から0層にかけてのそのあり方は、今回の調査でも同様に確認できた。

## 第3節 石器の器種分類

本書で採用した石器の器種分類については、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15－信濃町内その1－』（長野県埋蔵文化財センター2000）、『旧石器考古学辞典』（松藤編2000）、『石器の見方』（竹岡2003）等を主に参考とした。なお、本節でいう石器は「広義の石器」である（竹岡2003）。

### ①ナイフ形石器

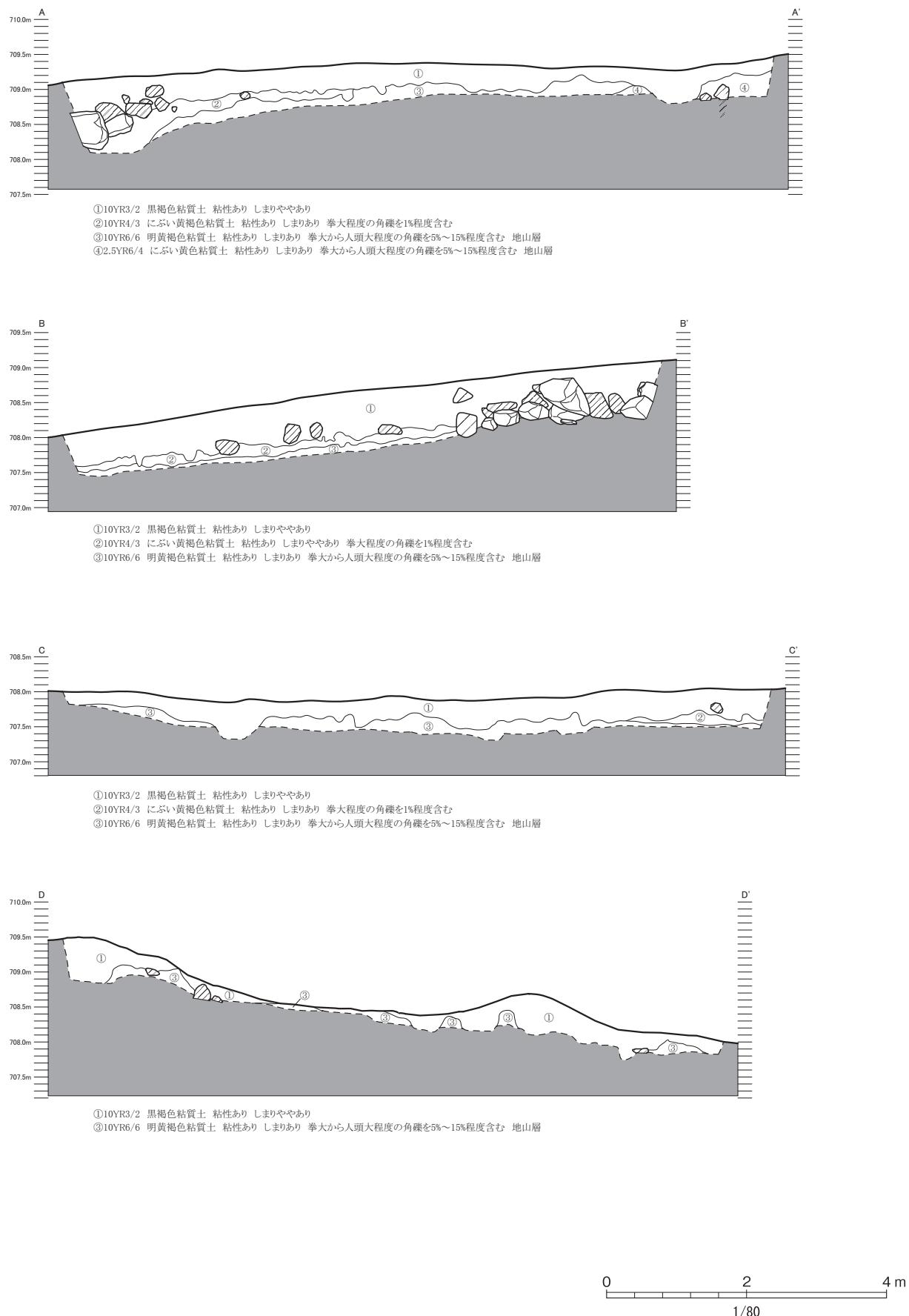
素材の縁辺に形成されたエッジを刃部とし、一方で刃潰し（プランティング）加工による側辺が認められる石器。日本列島の後期旧石器時代を代表する石器である。型式に、茂呂型・杉久保型・国府型・切出形などの名称がある。石刃・縦長剥片・翼状剥片等を素材とし、細長い形状となる。

### ②角錐状石器

先端から基部にかけて側辺全体に急角度の剥離を行い、丁寧な加工で先端部を作り出した石器。

### ③石刃

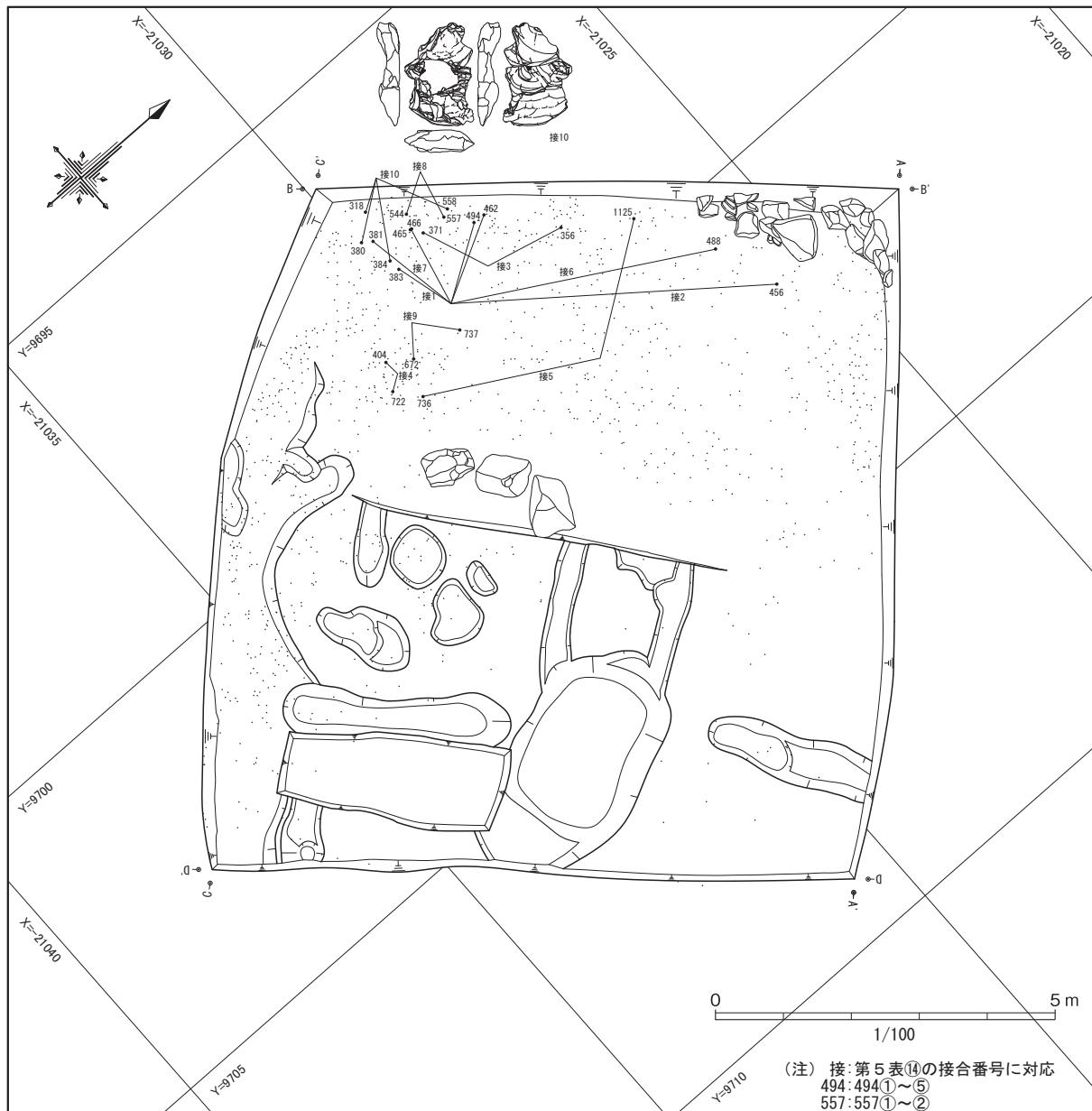
縦長の剥片のうち、特に両側辺が平行する規格的な剥片を指し、「目的的剥片」の代表例である。石刃技法を構成する一つであり、石核側には定型的な石刃を剥離した痕跡が認められる。石刃技法による剥離の際に生じる「稜付石刃」もここに含む。



第5図 大林A遺跡土層断面図



第6図 大林A遺跡遺物ドット図



第7図 大林A遺跡遺物接合図

第5表 大林A遺跡出土遺物観察表⑭(56頁続き)

遺物番号	器種名	接合番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g
OBS0383	石核	1	116.1	116.8	45.4	474.8
OBS0494 ①	剥片	1	24.6	81.0	25.5	33.4
OBS0494 ②	剥片	1	67.9	34.4	20.0	26.3
OBS0456	剥片	2	124.3	69.7	33.5	33.5
OBS0462	剥片	2	30.3	45.5	13.9	13.6
OBS0465	石核	2	156.1	194.2	78.7	1635.2
OBS0466	剥片	2	50.7	59.4	8.1	17.8
OBS0494 ③	剥片	2	56.6	66.4	27.1	69.5
OBS0356	分割剥片	3	30.1	68.1	44.7	73.3
OBS0371	分割剥片	3	32.3	62.5	58.9	89.5
OBS0404	剥片	4	99.8	52.3	29.1	117.1
OBS0722	剥片	4	77.5	78.2	26.4	123.6
OBS0736	剥片	5	65.6	90.4	22.4	114.7
OBS1125	石核	5	53.2	113.0	51.1	356.7
OBS0488	節理割れの剥片	6	26.5	26.4	42.6	16.0
OBS0494 ④	節理割れの剥片	6	60.5	46.8	42.8	84.2
OBS0381	二次加工剥片	7	76.0	58.4	23.7	73.5
OBS0494 ⑤	剥片	7	57.8	12.7	33.0	12.3

[第7図の接合資料観察表]

遺物番号	器種名	接合番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g
OBS0544	剥片	8	80.3	70.5	24.1	126.7
OBS0557 ①	分割された石核	8	136.6	185.5	49.2	945.2
OBS0557 ②	分割された石核	8	141.3	135.1	59.4	675.7
OBS0672	剥片	9	74.7	67.5	14.3	42.7
OBS0737	剥片	9	50.7	52.4	11.6	25.2
OBS318	剥片	10	118.5	64.5	36.5	232.0
OBS380	剥片	10	93.5	79.0	26.0	184.0
OBS384	剥片	10	70.0	93.0	24.0	118.2
OBS558	剥片	10	61.0	74.0	17.0	72.7

④搔器

素材剥片の一端に急角度の刃部を形成した石器であり、刃縁は弧状を呈することが多い。縦長状の素材剥片を使う「先刃形搔器」と、素材の周囲に弧状の刃部が巡る「円形搔器」の2種類が代表的である。

⑤削器

加工によって形成された幅の広い刃部をもつ石器である。加工の種類は多様である。

⑥鋸歯状石器

加工によって、石器の辺に凹みが連続して見られる石器である。

⑦二次加工のある剥片

器種としての認定に至らない、剥片に二次加工を施した石器である。

⑧微細剥離のある剥片

数mm程度の微細な剥離が剥片の縁辺に認められる石器である。

⑨石核

剥片を剥いだ痕跡が認められる石器である。

⑩剥片

石核からの剥片剥離時に生じる剥片と、石器製作時の二次加工により生じる剥片である。

⑪碎片

剥片のうち、長さ・幅1cm未満のものを碎片とする。

## 第4節 遺物

### 1) ナイフ形石器（第8図～第13図・報告書遺物番号001～019）

全て下呂石（湯ヶ峰流紋岩、以下同じ）製である。

#### ①第1類

一側辺に急角度剥離による刃潰し加工を施し、尖頭部を作り出したナイフ形石器である。素材には横長剥片または幅広の剥片が利用される。

001は左側辺に急角度の刃潰し加工が認められる。断面は先端から基部まで三角形状になる。先鋭な尖頭部が作り出されている。幅広の素材剥片を用い、成形加工で素材を大きく変形させる。

002は、横長剥片の基辺に相当する右側辺に急角度の刃潰し加工を加える。尖頭部は明瞭に作り出されていない。

003は、横長剥片の基辺に相当する右側辺に急角度の刃潰し加工が認められる。刃潰し加工途中で、上部側が折損したようである。

004は縦長剥片を素材とし、先端部右側辺に急角度の刃潰し加工が行われる。基部を欠損する。

#### ②第2類

側辺と基部の二側辺を中心に刃潰し加工を施したナイフ形石器である。素材には薄手の縦長剥片が利用される傾向がある。

005は縦長剥片を素材とし、右側辺及び基辺に細かな刃潰し加工が施される。平面形は細長く、基辺に平坦打面が残る。先端は尖鋭に作り出されている。素材剥片背面の剥離軸には、剥片剥離軸に直交するものが認められる。

006は縦長剥片を素材とし、先端部右側辺に細かな刃潰し加工が認められる。基部を欠損するが、005と共に通する属性が多く認められるため、本分類に含めた。

#### ③第3類

素材剥片は縦長・横長・幅広と多様で厚みがある。素材の打面側と末端側の二側辺を中心に刃潰し加工を行い、そのうち一側辺が急角度になる傾向があるナイフ形石器である。先端部は先鋭ではない。素材剥片の形状を大きく変形させ完成させる特徴が見られる。

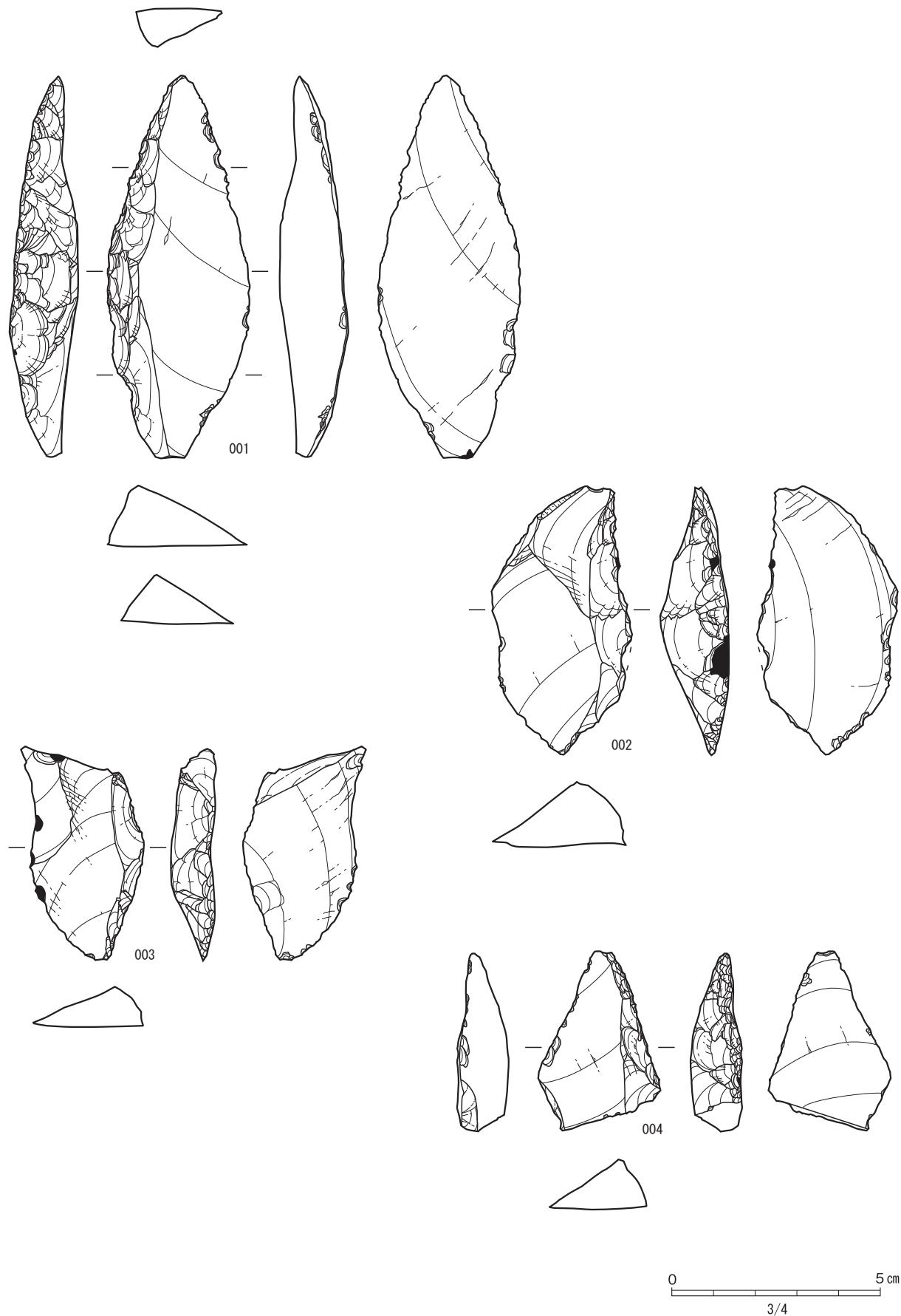
007は、素材の側辺と末端辺に正方向の刃潰し加工を行い、そのうち側辺を急角度に加工する。最大幅が石器の下半部にあり、全体的に幅広である。

008は、横長剥片の末端に相当する右側辺に正方向の刃潰し加工を行ったナイフ形石器である。左側辺に平坦打面が残存する。

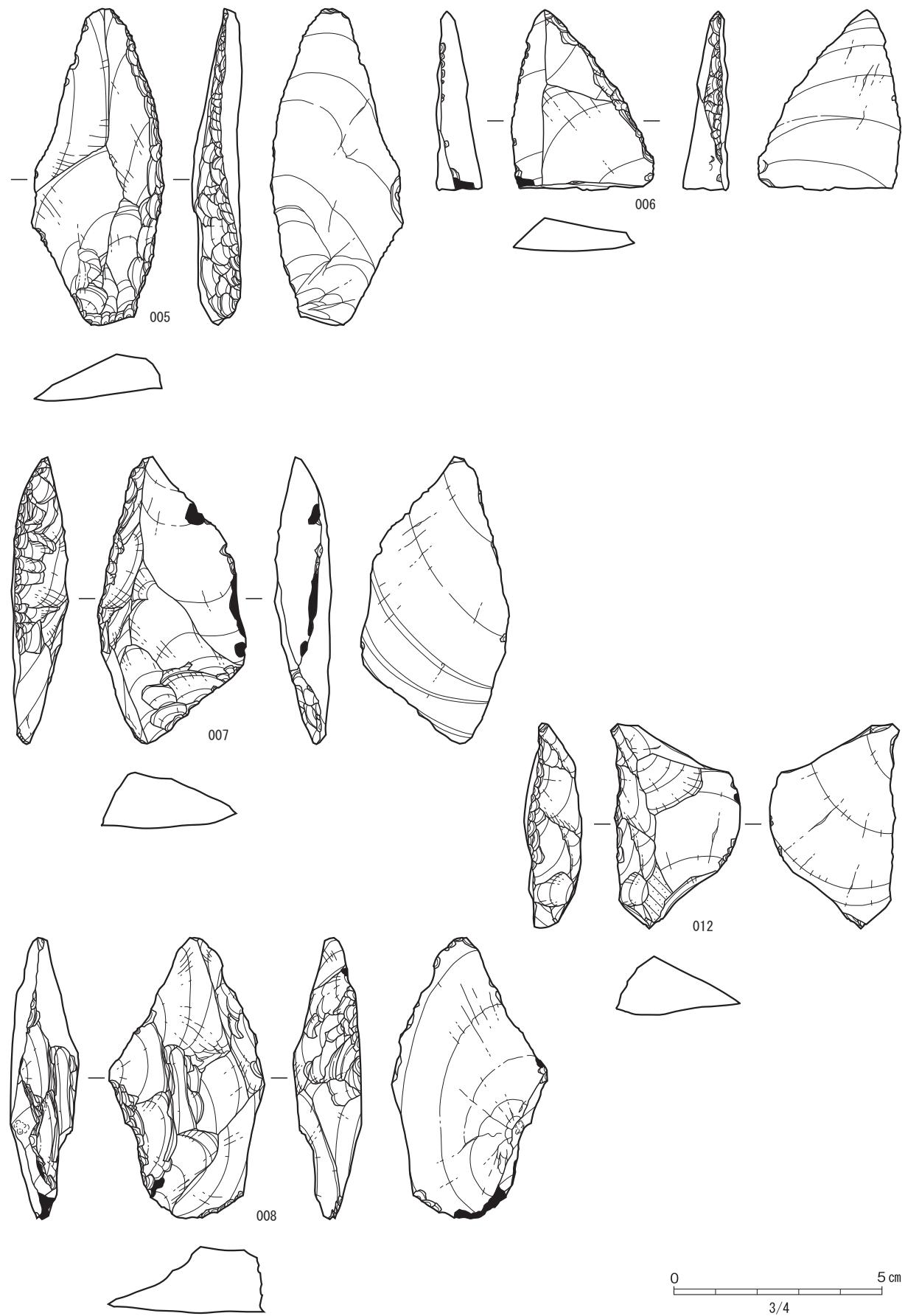
009は、幅広の剥片を素材として、左側辺に正方向の急角度剥離が見られる。右側辺の加工は基部側に留まる。

010は、2cm近くの厚手の横長剥片を利用し、左側辺と右側辺の基部側を中心に正方向の刃潰し加工が認められる。尖頭部から基部にかけての断面形は三角形状になる。

011は、素材の横長剥片の打点側を急角度に刃潰し加工を行う。素材の末端辺にも正・反方向の加



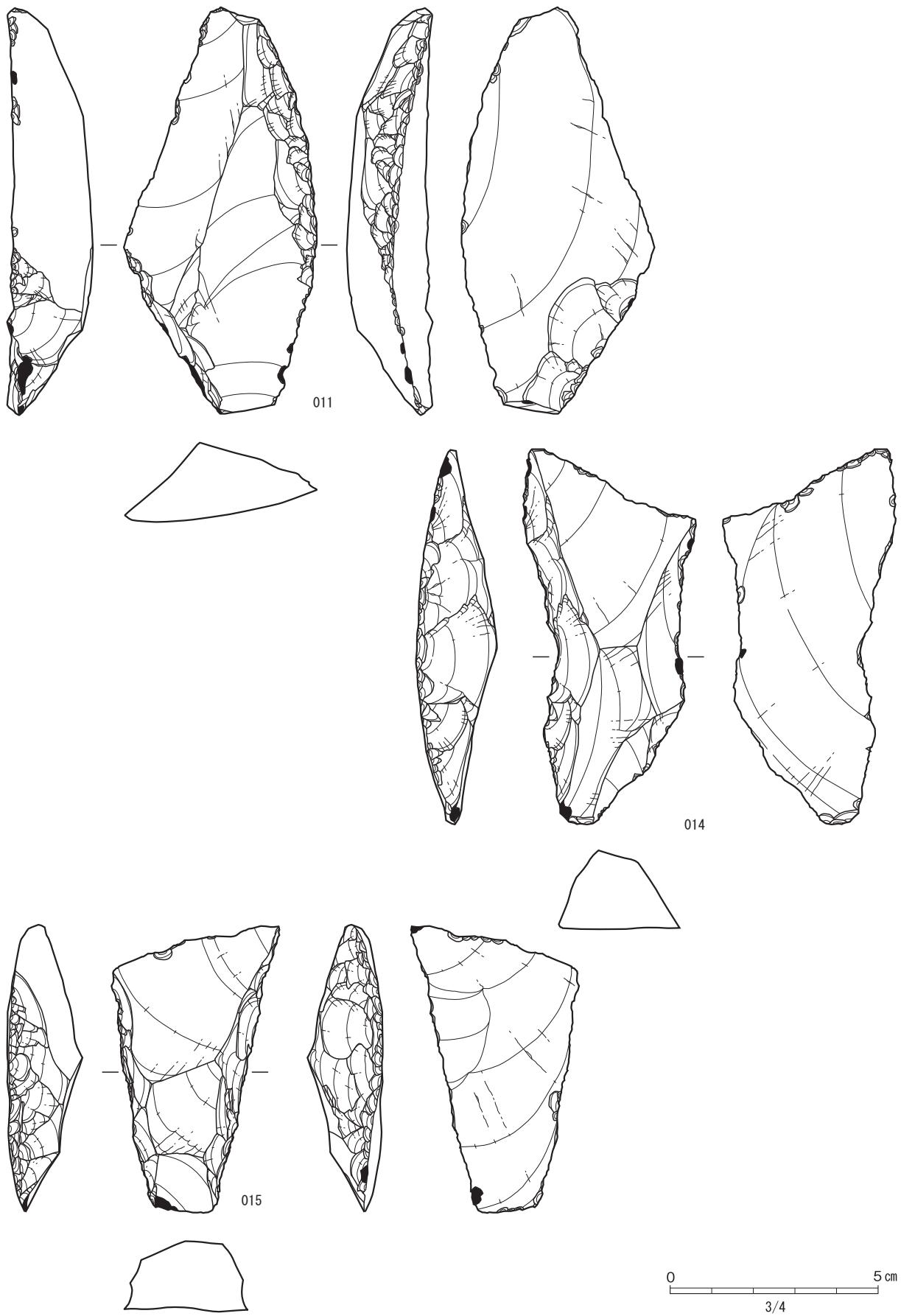
第8図 大林A遺跡出土石器①



第9図 大林A遺跡出土石器②



第10図 大林A遺跡出土石器③



第11図 大林A遺跡出土石器④

工を加える。最大長9.75cmの大形品である。

012は、加工途中の一部破片と考えられる。幅広の素材剥片の側辺を中心に、急角度の刃潰し加工が認められる。

013は、幅広の縦長剥片の末端辺と側辺に急角度の剥離を行う。尖頭部の作出はやや不明瞭である。

#### ④第4類

第4類は石器の基部を中心に急角度の刃潰し加工が見られ、先端が斜刃になる、いわゆる切出形ナイフ形石器である。基部に平坦加工が見られ、素材は横長剥片が利用される。先端が平刃傾向の台形様石器とは異なる一群である。

014は、横長剥片の基辺に正方向の加工が施されるが末端辺はほぼ無加工な状態である。基部が充分に作り出されている状態ではない。

015は、横長剥片の側辺と末端辺に正方向の急角度剥離が行われ、基部が作出される。先端部は無加工で、切出形ナイフ形石器の良品である。

016は、素材である横長剥片の基辺に、正方向の急角度剥離が見られる。素材剥片の末端辺には加工は見られない。先端部は斜刃で、微細な剥離が見られる。

017は、横長剥片の基辺と末端辺に正方向の急角度剥離が行われ、基部が作出される。

018は、厚手の縦長剥片を素材とし、左右両側辺に正方向の急角度剥離が施される。先端は無加工である。石器の末端を一部欠損する。

#### ⑤第5類

石器の幅と厚さがほぼ同一になるナイフ形石器で、一側辺に正方向の急角度剥離が見られる。横断面はいずれの場所も三角形状を程する。

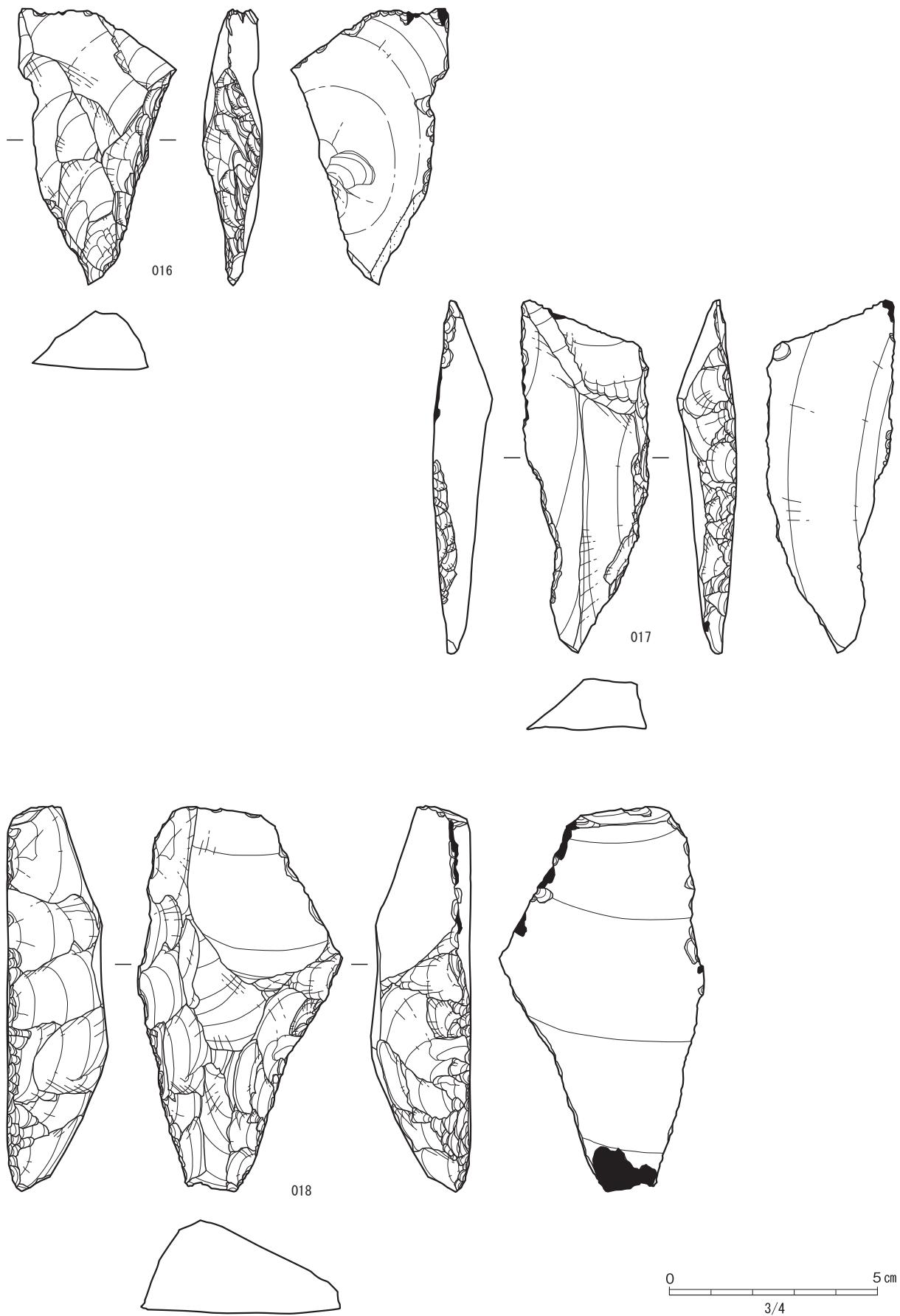
019は左側辺に急角度の刃潰し加工が認められる。尖頭部から基部にかけての断面形は三角形状になる。

#### 2) 類角錐状石器（第13図・報告書遺物番号020～021）

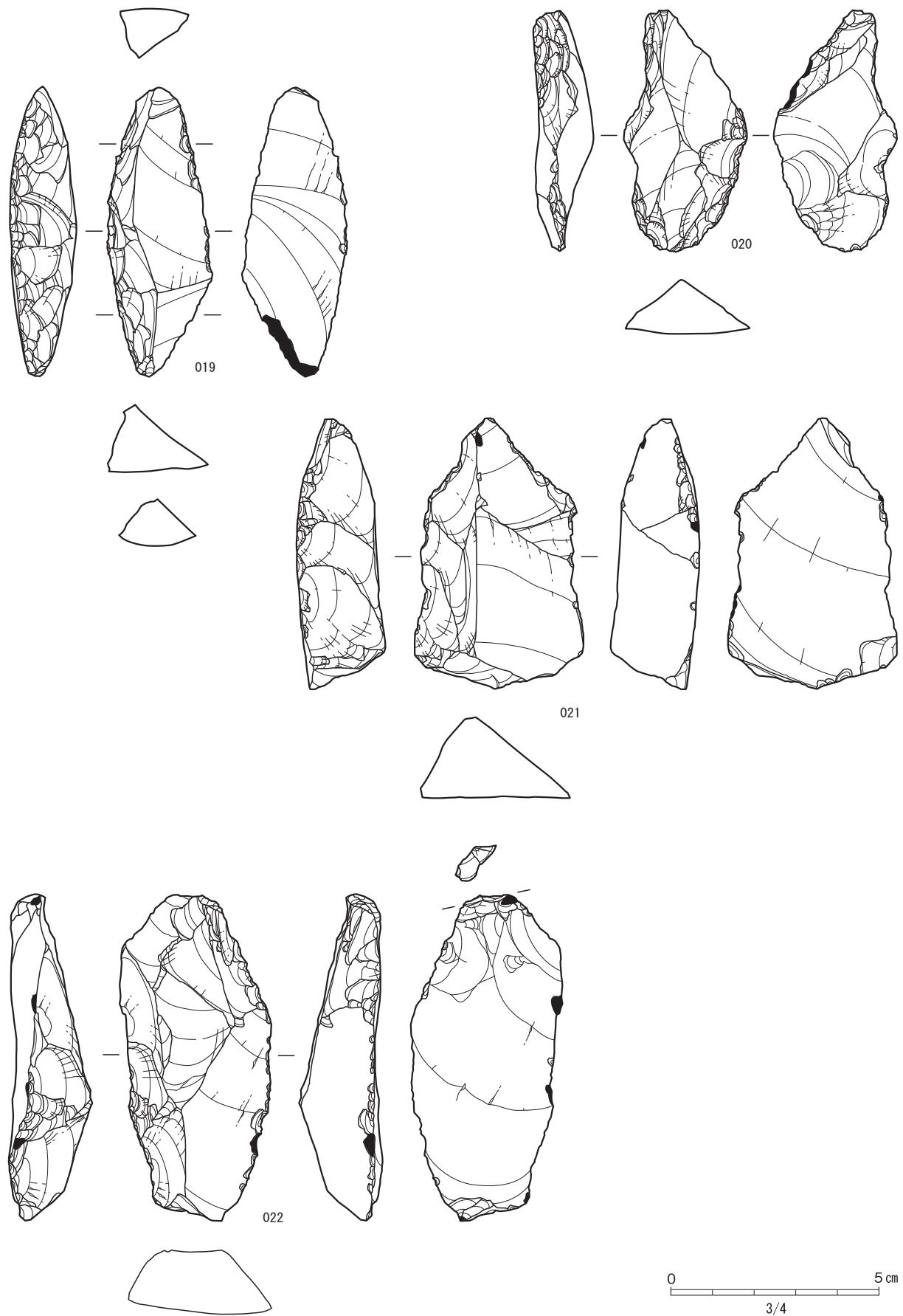
先端から基部にかけて側辺全体に急角度の剥離を行い、丁寧な加工で先端部を作り出した、断面が三角形状を程する石器を角錐状石器と呼ぶが、ここでは、不完全ながらも、急角度の剥離で先端部を作り出す石器を「類角錐状石器」と仮称して説明する。全て下呂石製である。

020は、素材である横長剥片の基辺及び末端辺側に急角度剥離が施され、また、右側辺手前にも連続する急角度剥離が認められる。先端部が曲がり、その作り出しは不充分であるが、角錐状石器と共通する属性を多くもつことから、類角錐状石器とした。

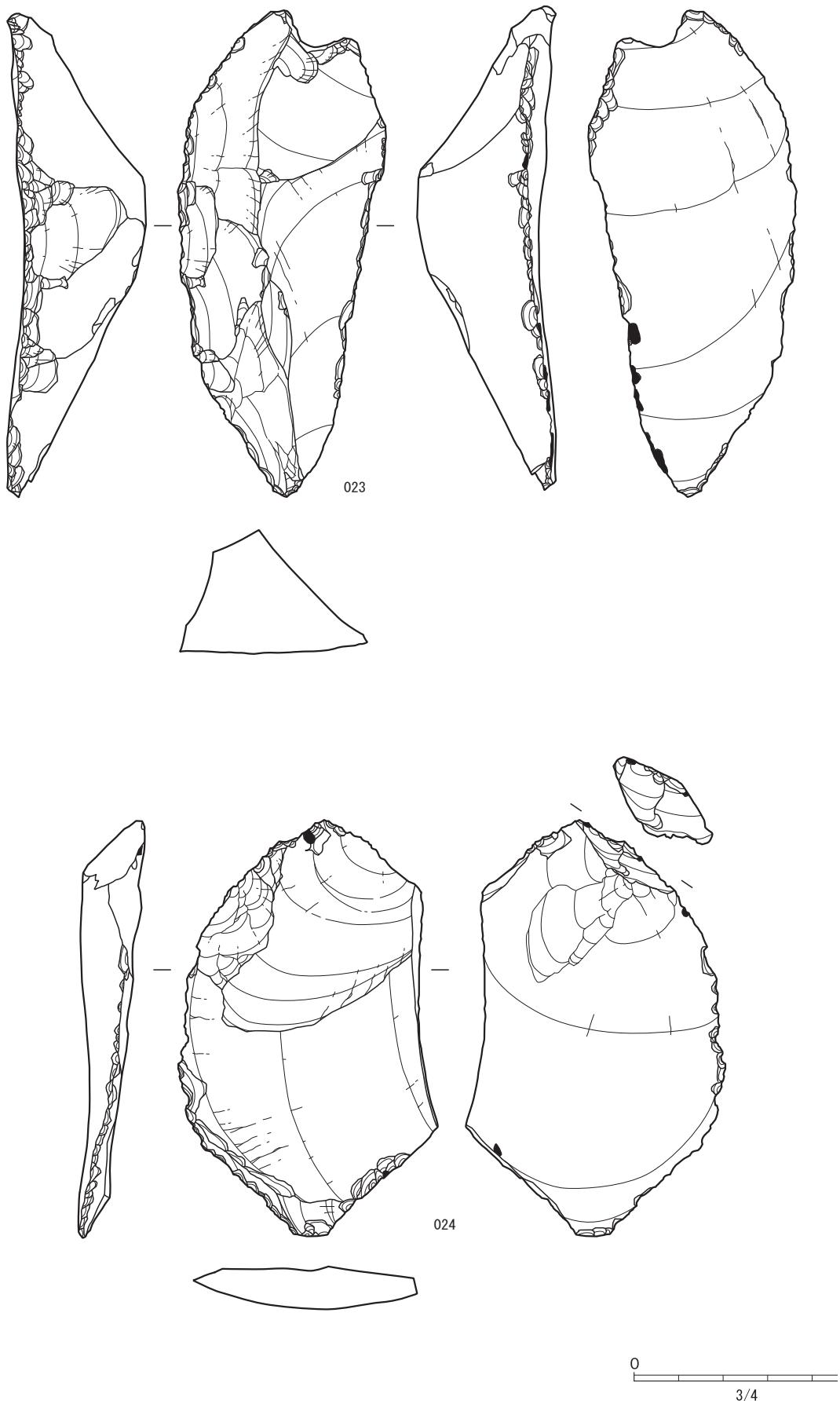
021は大形の石器で、左側辺に正方向の急角度剥離が見られる。右側辺では先端部に細かな剥離加工が認められる。不充分ながらも尖頭部を作出することが見られるため、類角錐状石器とした。



第12図 大林A遺跡出土石器⑤



第13図 大林A遺跡出土石器⑥



第14図 大林A遺跡出土石器⑦

### 3) 削器（第13図～第16図・報告書遺物番号022～028）

全て下呂石製である。

素材剥片と刃部の位置関係から、3類型に分類できる。

第1類（022・023）は、縦長の素材剥片の両側辺を刃部とする石器である。

022と023は、左右両側辺に正方向の加工と微細な剥離が認められる。023は厚手の素材剥片が利用される。

第2類（024・025・026）は、幅広の剥片を素材とし、基本的に両側辺を刃部とする石器である。

024は、素材の左側辺から末端辺を中心に、正方向の細かい剥離加工が認められる石器である。

025は、素材の基辺と末端辺を中心にやや急角度の正方向の加工を加える。細かい剥離が連続する二辺があり、その縁辺はやや鋸歯状である。

026は、素材の左右に細かい剥離が連続的に認められる。左側辺に鋸歯状の縁辺が認められる。「鋸歯状削器」と考えられる。

第3類（027・028）は、横長剥片を素材とし、素材の末端を刃部とする石器である。

027は、厚手の素材の末端辺に、連続する正方向の剥離加工を加える。やや急角度の加工が施される。

028は、厚手の素材の末端辺に、連続する正方向の剥離加工を加える。加工はやや急角度であり、縁辺がやや鋸歯状になっている。

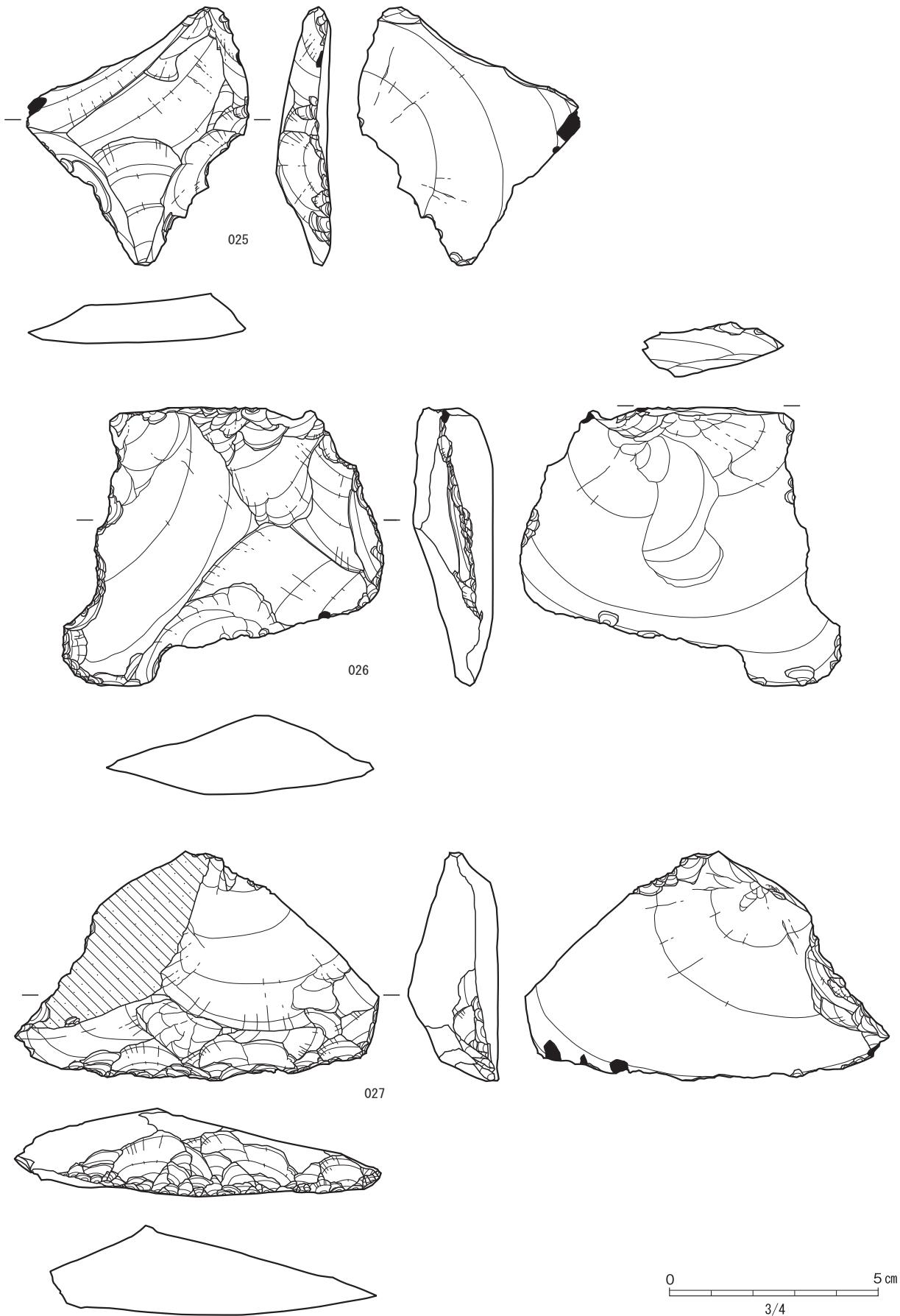
### 4) 搔器（第16図・報告書遺物番号029～031）

全て下呂石製である。

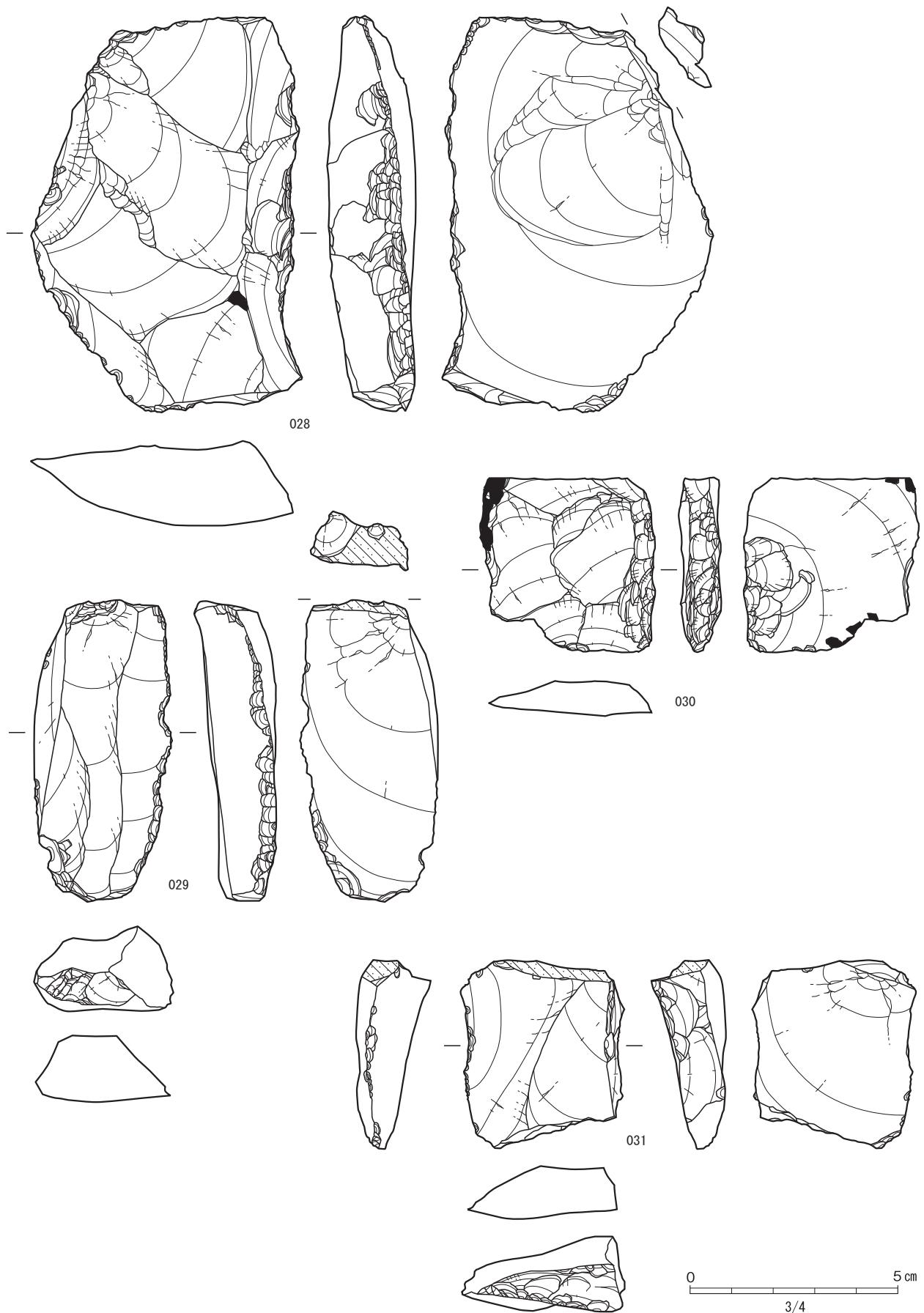
029は、剥片の左側辺に連続する細かな剥離が施され、末端は急角度剥離で刃部を形成する。

030は、素材剥片の打面に相当する右側辺に、連続する正方向の加工が施される。加工の規模が一定し、角度もやや急角度であるため、掻器と考えられる。

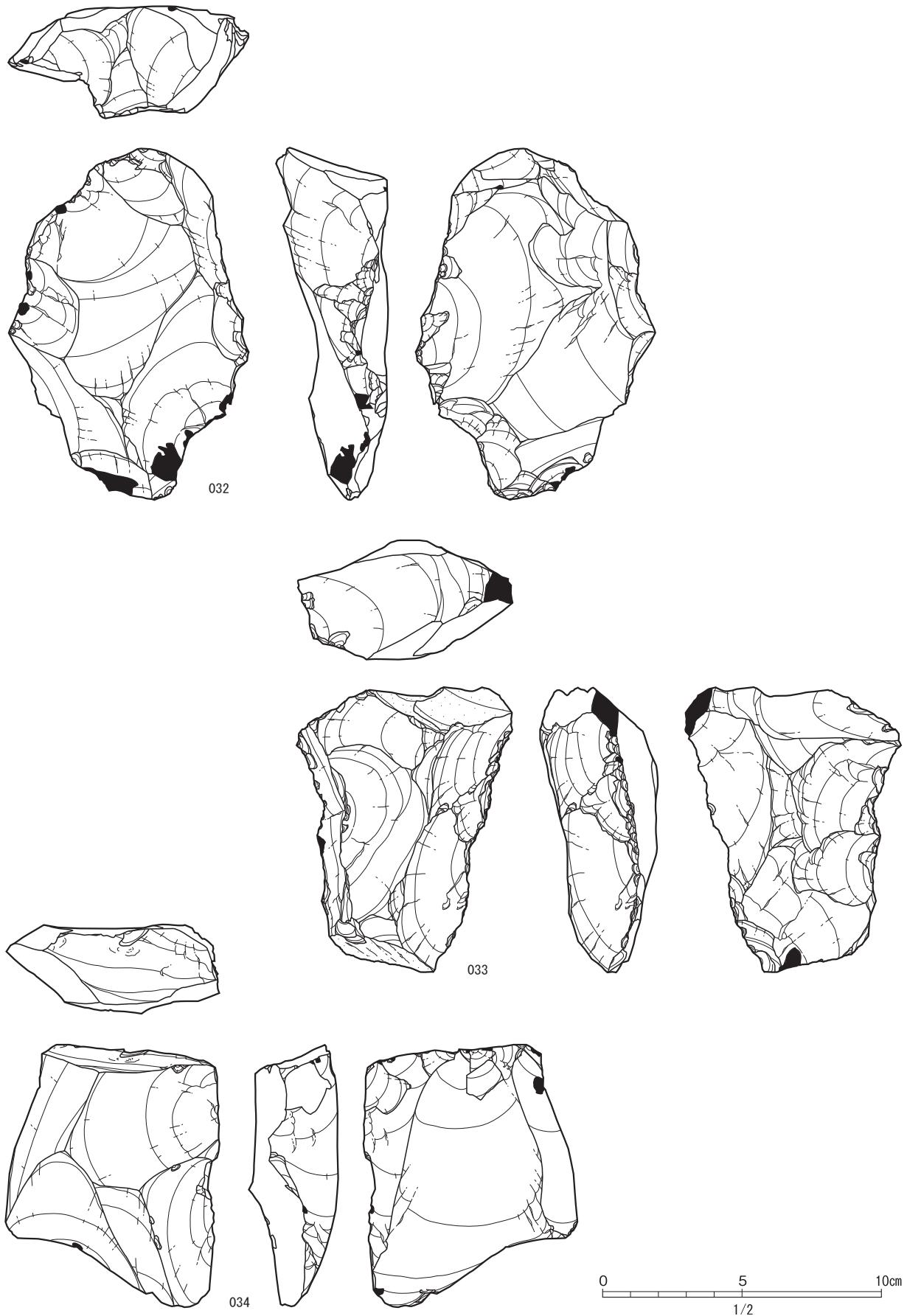
031は、幅広の剥片を素材とし、末端辺に正方向の急角度剥離を加える。



第15図 大林A遺跡出土石器⑧



第16図 大林A遺跡出土石器⑨



第17図 大林A遺跡出土石器⑩

5) 石核（第17図～第28図・報告書遺物番号032～053）

全て下呂石製である。

今回の発掘調査で出土した石核は、石核素材の形状、作業面の位置、打面転移（作業面転移）のあり方から大きく2つの類型に分類できる。

①第1類

第1類は直方体状の、板状剥片を素材とする石核である。作業面をある程度まで固定するため、鋭角な縁辺又は平坦面の縁辺に沿って打点を移動させ剥離を行う特徴が見られる。鋭角な縁辺を打面とする場合又は平坦面を打面とする場合については、双方が同一の石核に複合することもあることから、それが細分の要素であったとしても、その理由は見出し難いため、第1類内の細分はしていない。

032の素材は厚手の横長剥片で、裏面にポジ面が残る。表面に求心状の剥離が見られる。

033の素材も厚手の横長剥片で、裏面にポジ面が残る。両側面に打点が横に移動し並行剥離された痕跡が見られる。

034の素材も厚手の幅広の剥片で、裏面にポジ面が残る。打点が側辺を横移動し、並列剥離が行われる。

035は幅広の剥片を素材とする。打面と作業面が交互に入れ替わる交互剥離が行われ、求心状の剥離の痕跡が見られる。

036の素材は厚手の剥片である。背面に節理面を残し、正面が主要剥離面と考えられる。上面の平坦な節理面を打面とし、正面の作業面に並行剥離が見られる。正面から下面にかけて作業面の移動が見られる。

037の素材は剥片で、平坦な節理面もしくは剥離面を打面として貝殻状剥片を剥離する。交互剥離が見られる。

038は厚手の幅広剥片を素材とする。正面から右側面を作業面としてほぼ固定し、上面から連続的に縦長剥片を剥離する。裏面右下にはコーンクラックが数か所ある。

039は厚手の剥片を素材とし、作業面を固定して打点が平坦面を横移動し、剥離が行われる。

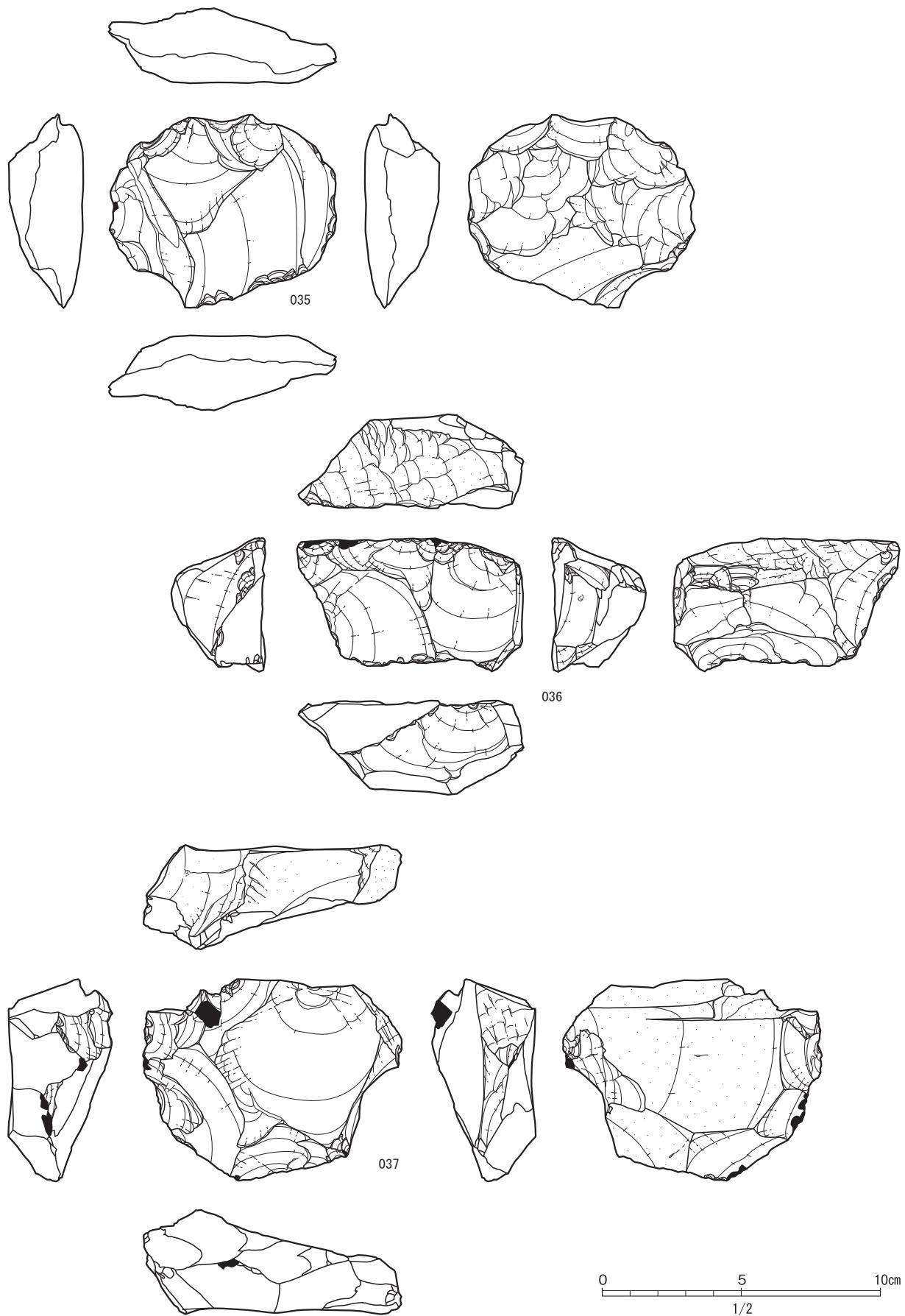
040も039と同様に、厚手の剥片を素材とし、作業面を正面にほぼ固定して上面から剥離が数回行われる。

041は厚手の剥片を素材とする。上面に打面の作出が見られ、その面を打面とし、作業面を正面に固定して、横に打点が移動して並列剥離が行われる。

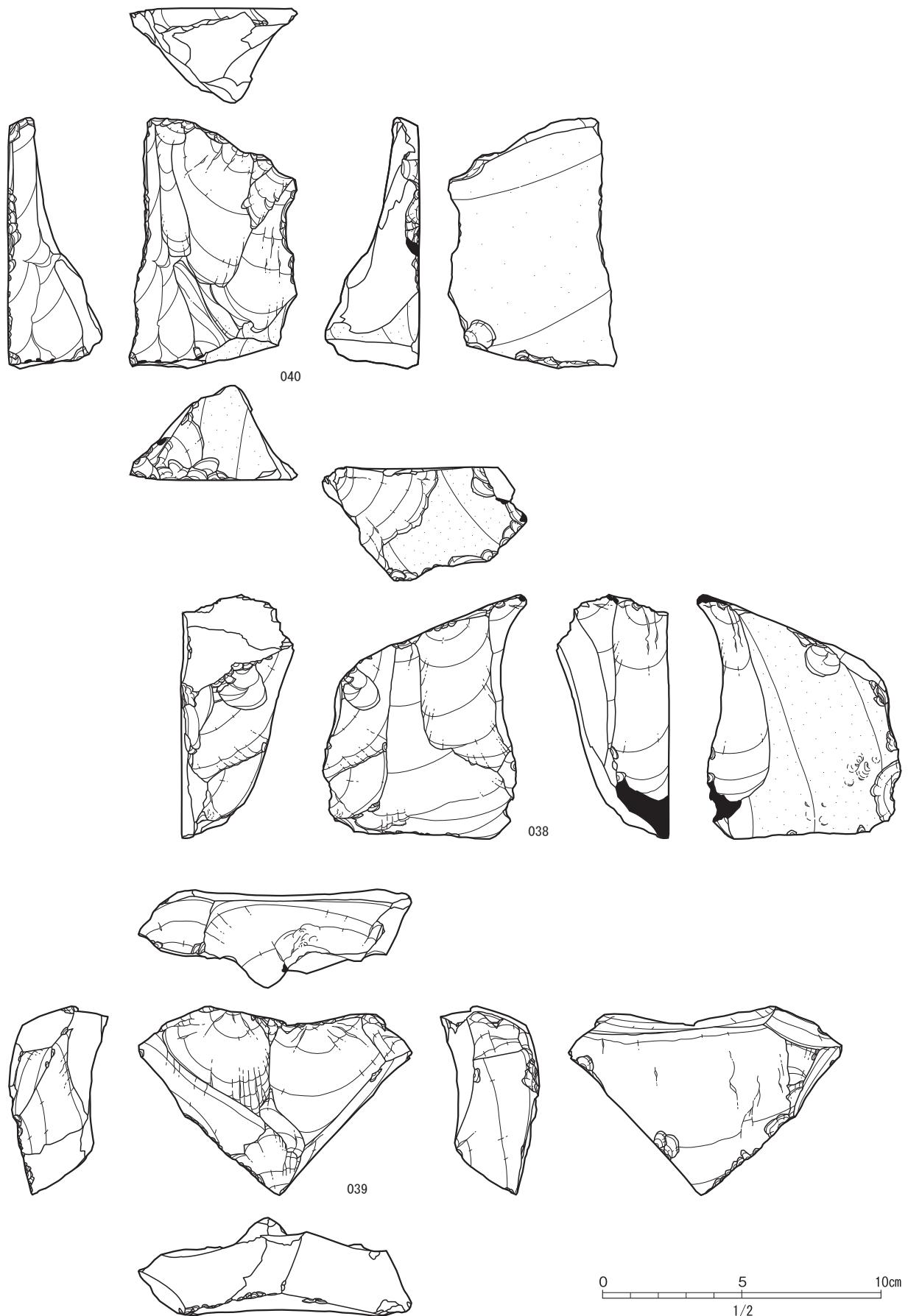
042は裏面にポジ面の残る厚手の幅広剥片を素材とする。縁辺を打点とし、求心状に剥離する。貝殻状剥片が剥離されている。左面では対向する上下の平坦面を打面として縦長剥片が剥離される。

043は長さ10cmを超える幅広の剥片を素材とする。裏面には、幅広の縦長剥片や貝殻状剥片といった形状の剥片を求心状に剥離した痕跡が認められる。ナイフ形石器第3類の素材となるような、やや大形で厚みのある目的的剥片が剥離されたものと考えられる。

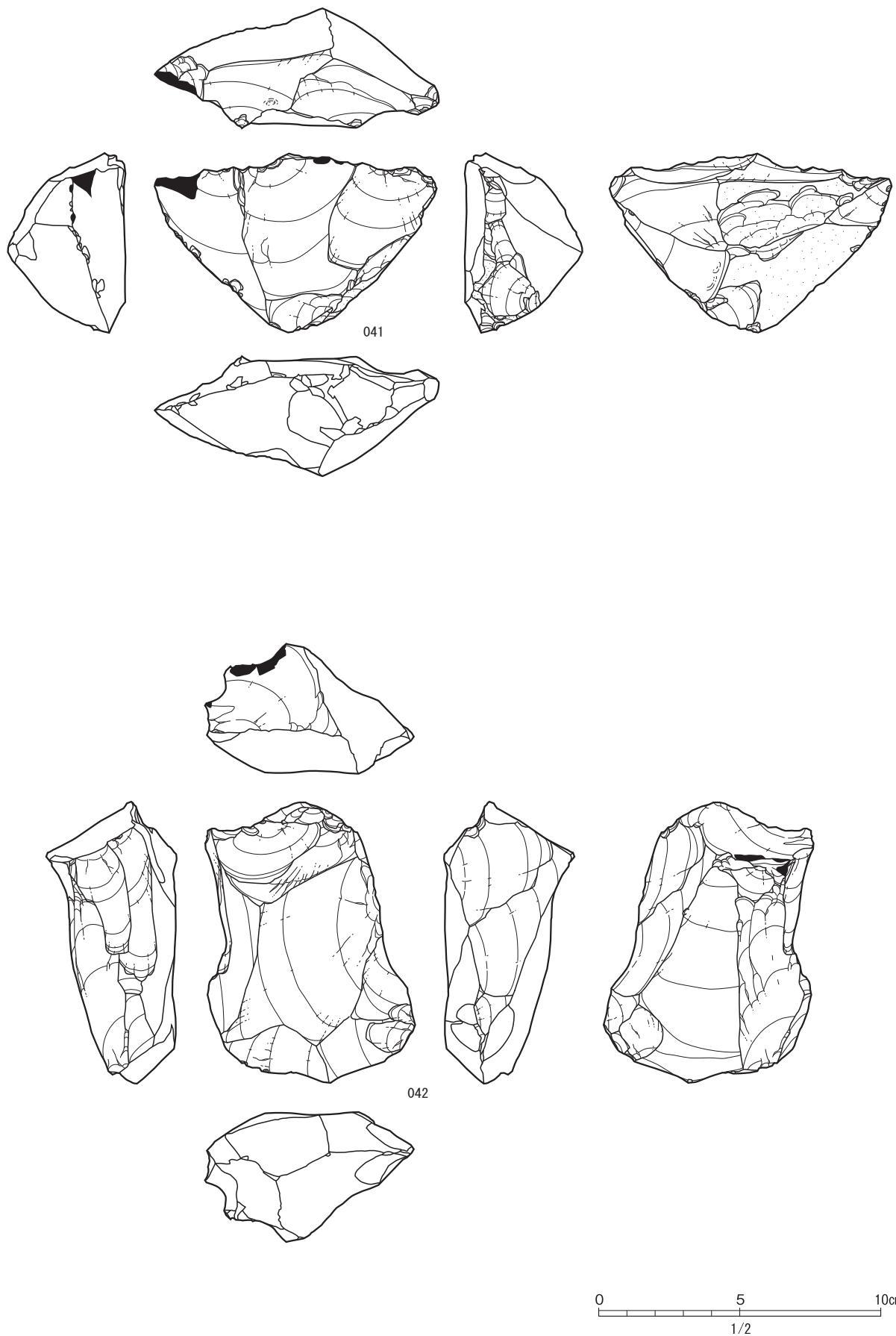
044は、正面の作業面が素材剥片のポジ面で、そこより幅広の縦長剥片が剥離される。右面は垂直な分割面で、ネガ面が形成される。その分割面は石核の中で最も新しい面であり、石核再生の痕跡とも考えられなくもない。



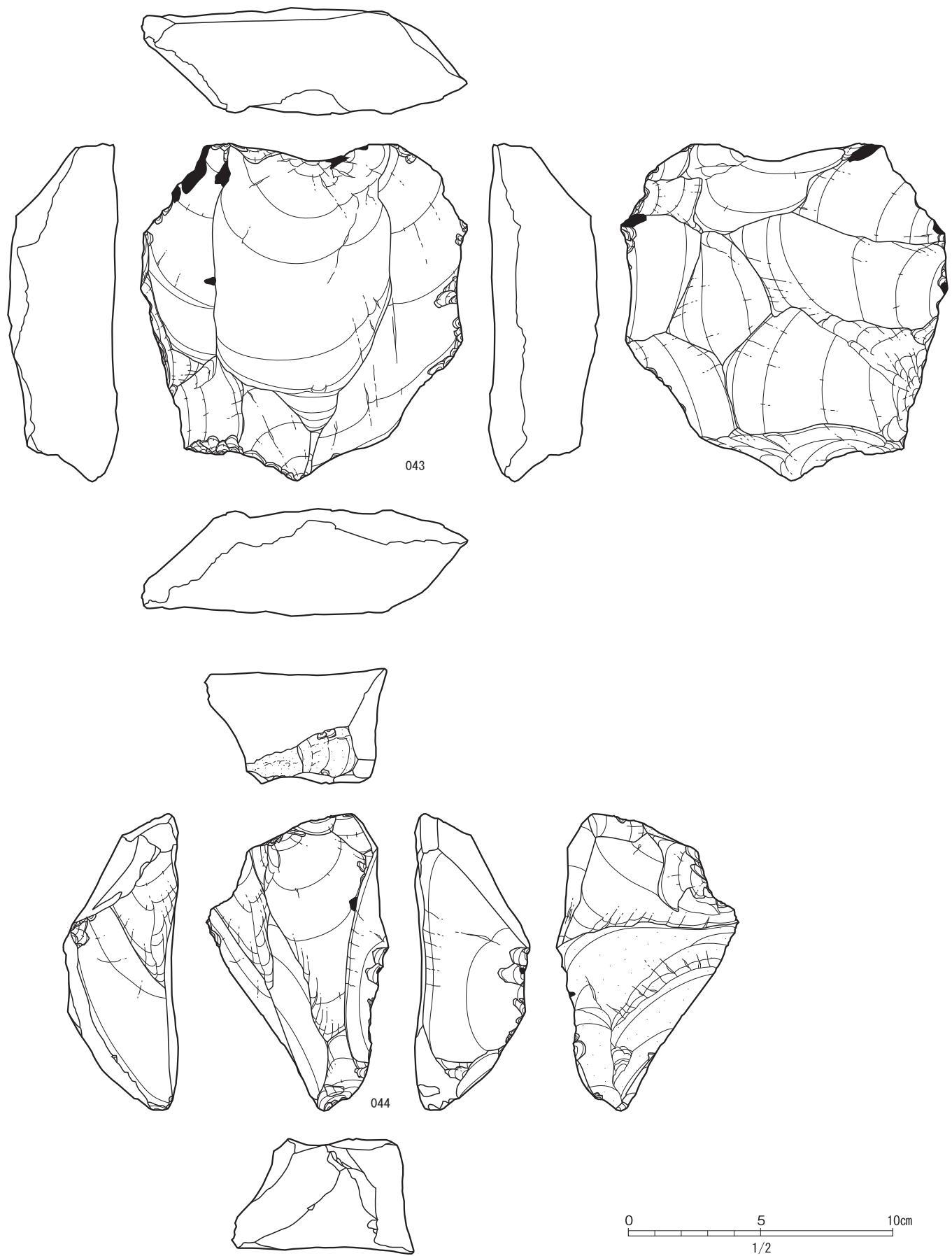
第18図 大林A遺跡出土石器⑪



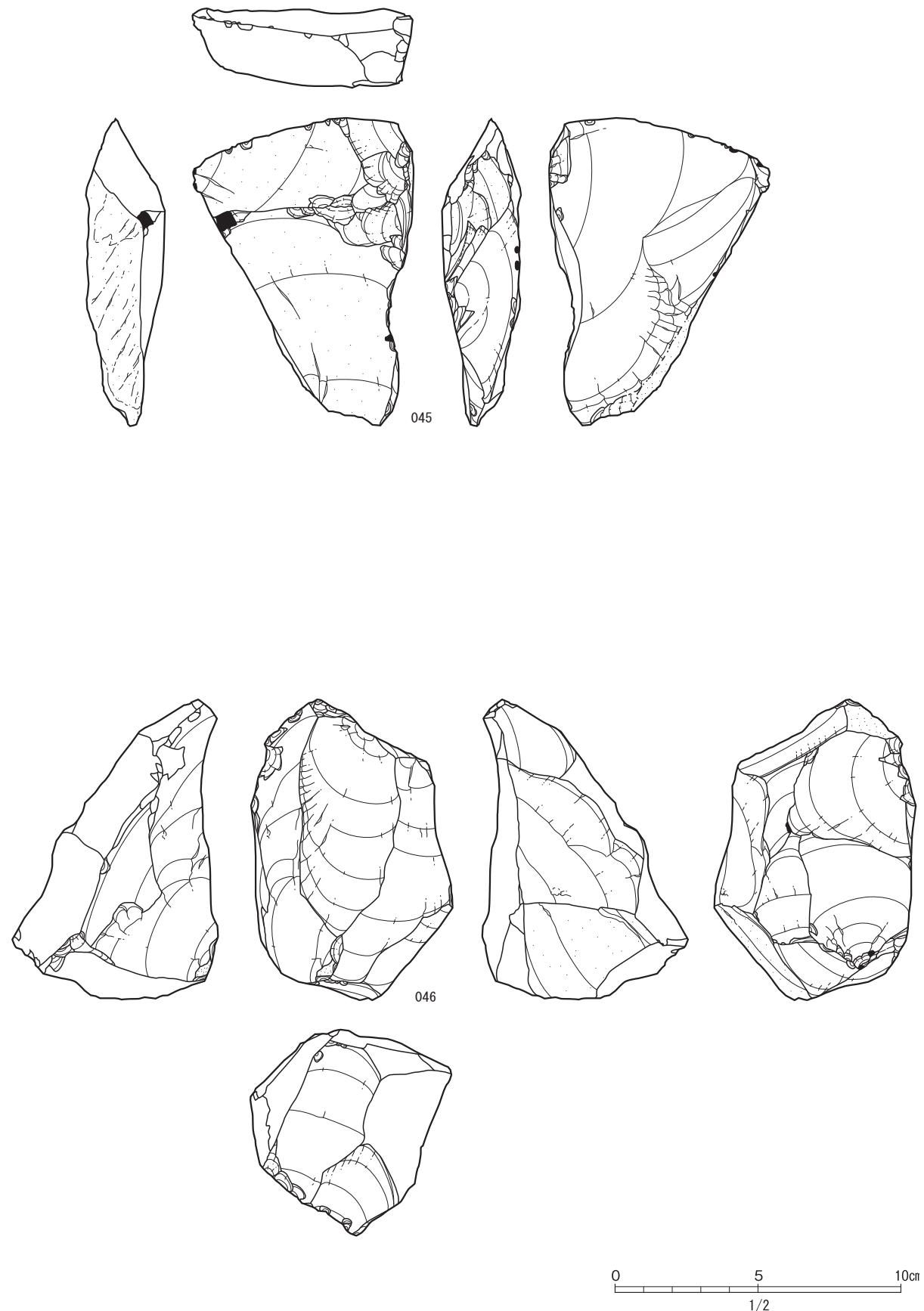
第19図 大林A遺跡出土石器⑫



第20図 大林A遺跡出土石器⑬



第21図 大林A遺跡出土石器⑭



第22図 大林A遺跡出土石器⑯

045 は手のひら大の幅広剥片を分割した状態を示す剥片である。剥片剥離の痕跡は見られない。第1類とした石核の素材として考えられるため、本類型に掲載した。

## ②第2類

第2類は立方体状（サイコロ状）の素材を用いた石核である。第1類に比べ並行剥離と打面転移の頻度が高い。

046 は大形の角礫を分割して得た素材を利用する。左面と右面がその分割面に該当するものであろう。正面の作業面から幅広の縦長剥片を、裏面及び下面の作業面から貝殻状剥片が剥離される。作業面の移動が見られる。

047 は上面と右面に分割面が見られる。正面では平坦な分割面を打面として並行剥離により幅広の縦長剥片を作出する。裏面と下面へ作業面の移動が認められる。

048 は上面の風化の進行した平坦面を打面として、並行剥離により正面作業面から右面作業面にかけて幅広の縦長剥片を剥離する。裏面へ作業面の移動が認められる。石核の最終形状は円錐形になる。

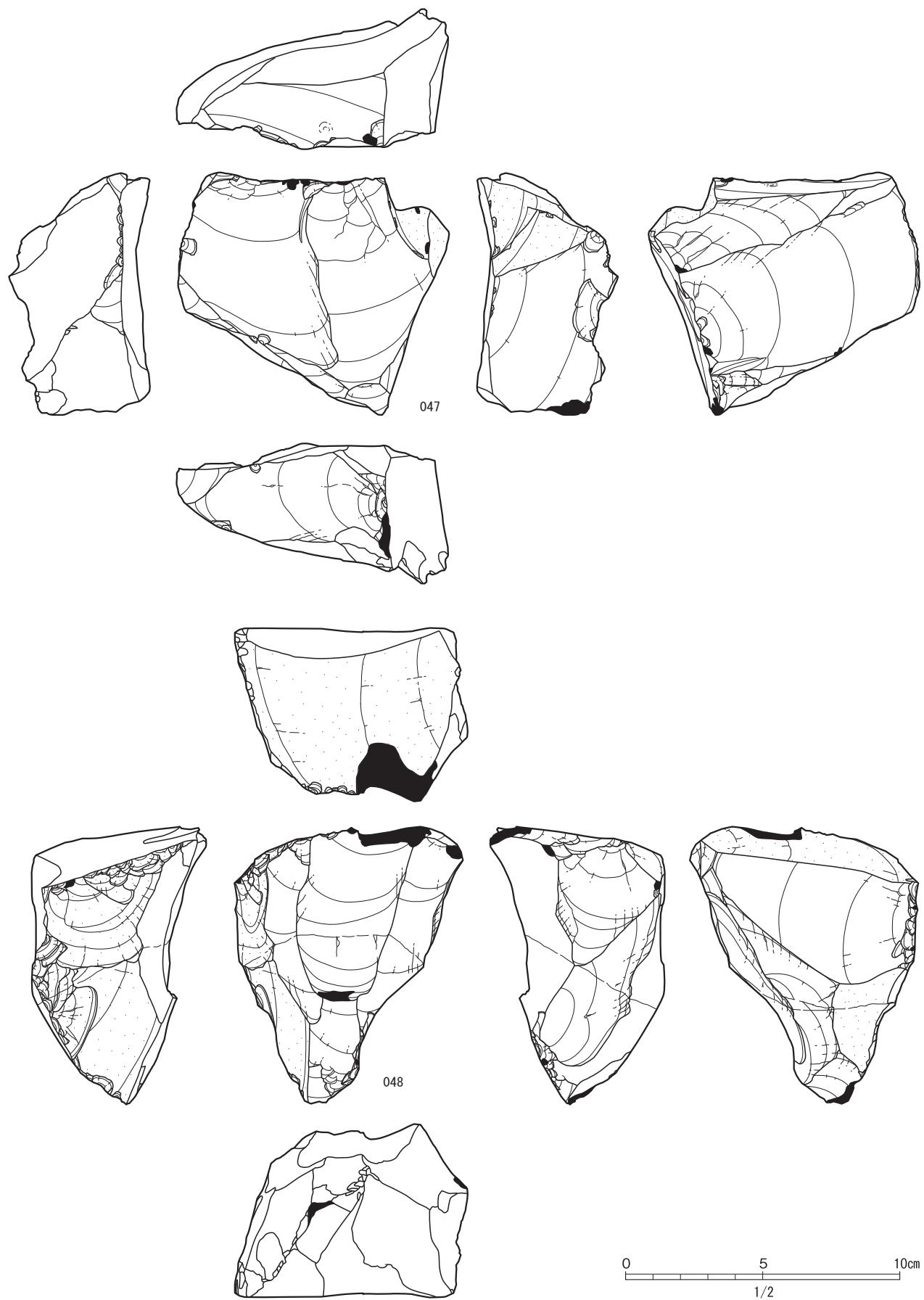
049 は正面の作業面に相当する面が、元々分割面であったと推定される。四方の大半が、自然面または節理面で覆われる。上面に打面の作出が見られ、その平坦面を打面に幅広の剥片が剥離される。

050 は裏面にネガ面の分割面が見られる。上面に打面を作出し、それを打面に正面と右面を作業面として幅広の剥片が剥離される。さらに剥離された面を打面に、90° の作業面移動をして下面に作業面が設定される。

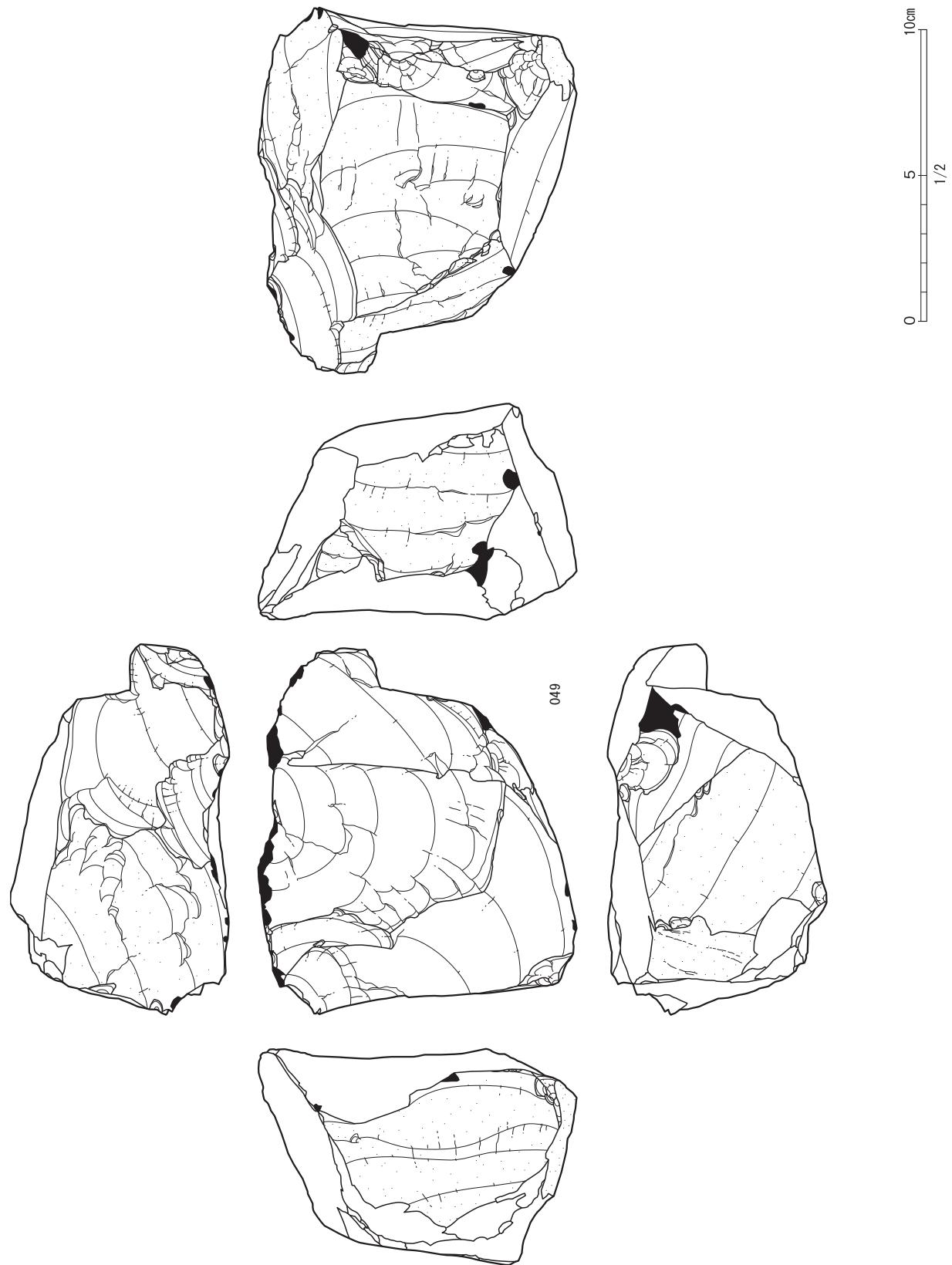
051 は、裏面が元々の分割面と推定される。上面で打面の作出を行い、続いて正面作業面において剥片剥離が続く。また、上面に打面とし、左面・右面・下面の作業面で幅広の剥片が剥離される。石核の最終形状は円錐形になる。

052 は、大形で細長の分割剥片を素材とした石核で、正面に分割面の一部が見られる。正面には、大形の横長剥片が剥離された跡があるが、風化が一段階進んでいる面であり、その評価が難しい。裏面には縁辺から求心状に、長さと幅が 5 cm 程度の幅広・貝殻状剥片が剥離された痕跡があり、主要な作業面であったことがわかる。

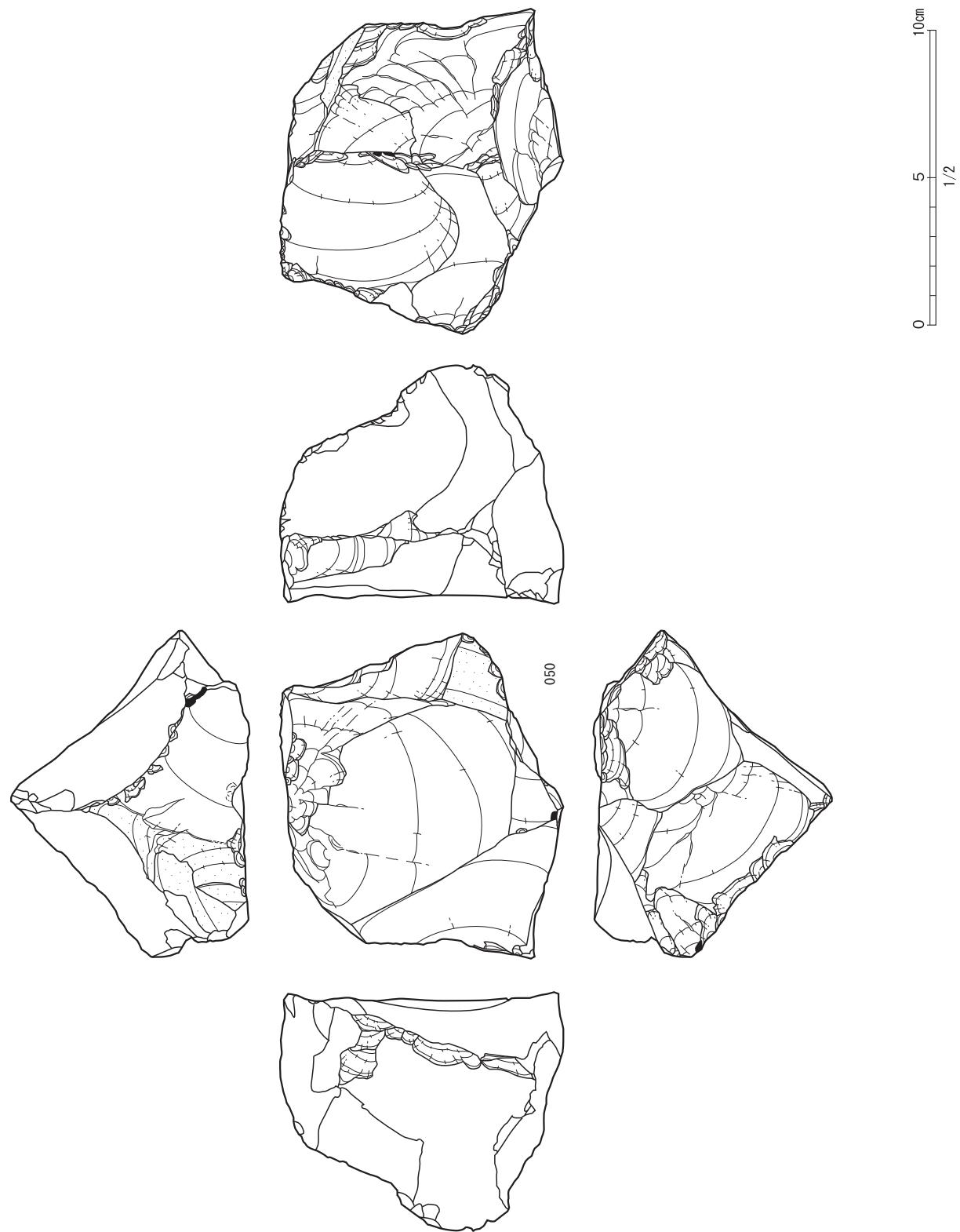
053 は角礫を素材にしたと考えられる石核で、正面の作業面に並行剥離による幅広剥片の作出が見られる。上面には打面の作出が見られる。左面と右面に作業面の移動が見られる。長さ 8 cm から 9 cm 程度の幅広の縦長剥片が剥離されており、出土品の中で最大級の石核である。



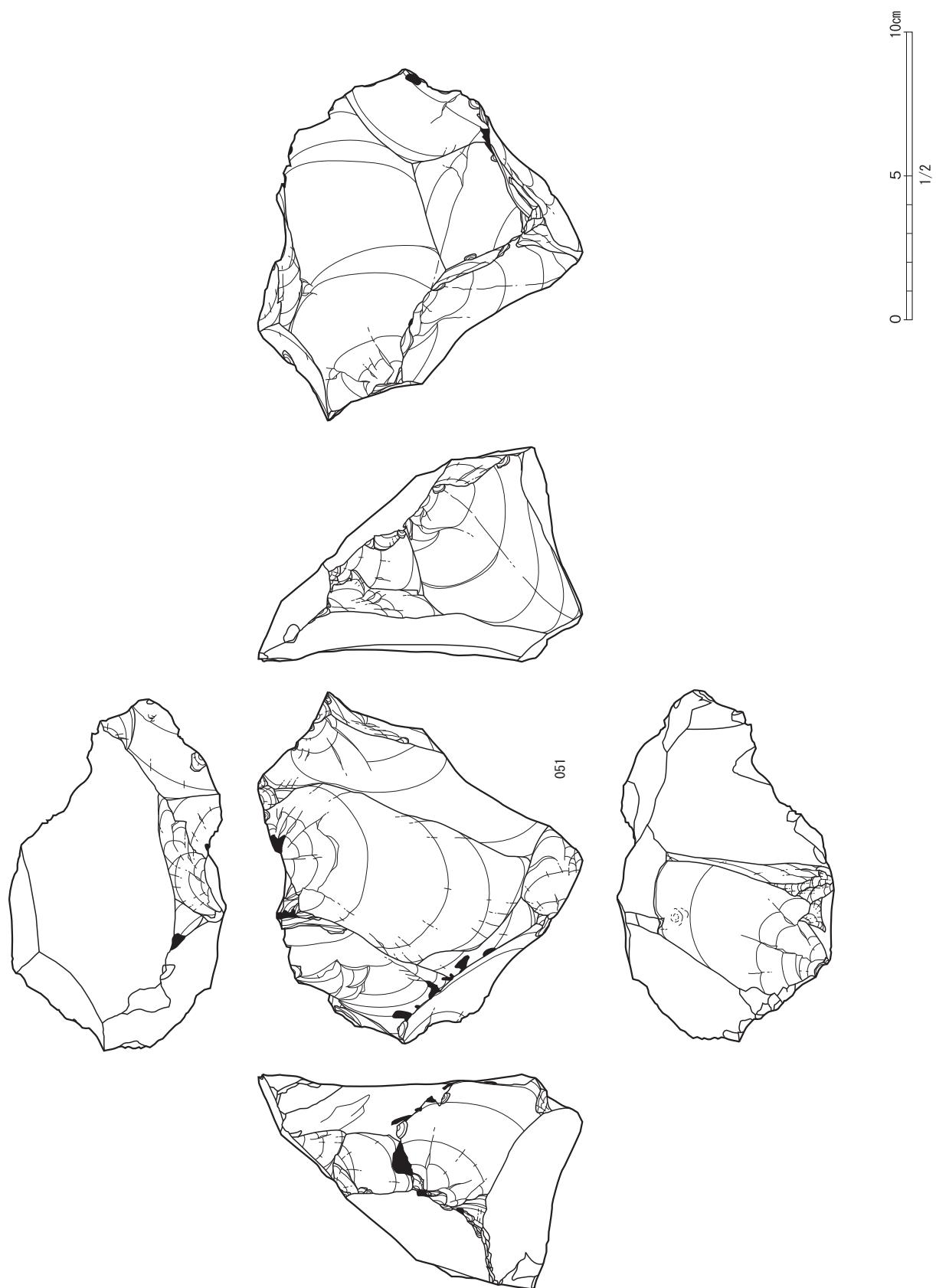
第23図 大林A遺跡出土石器⑯



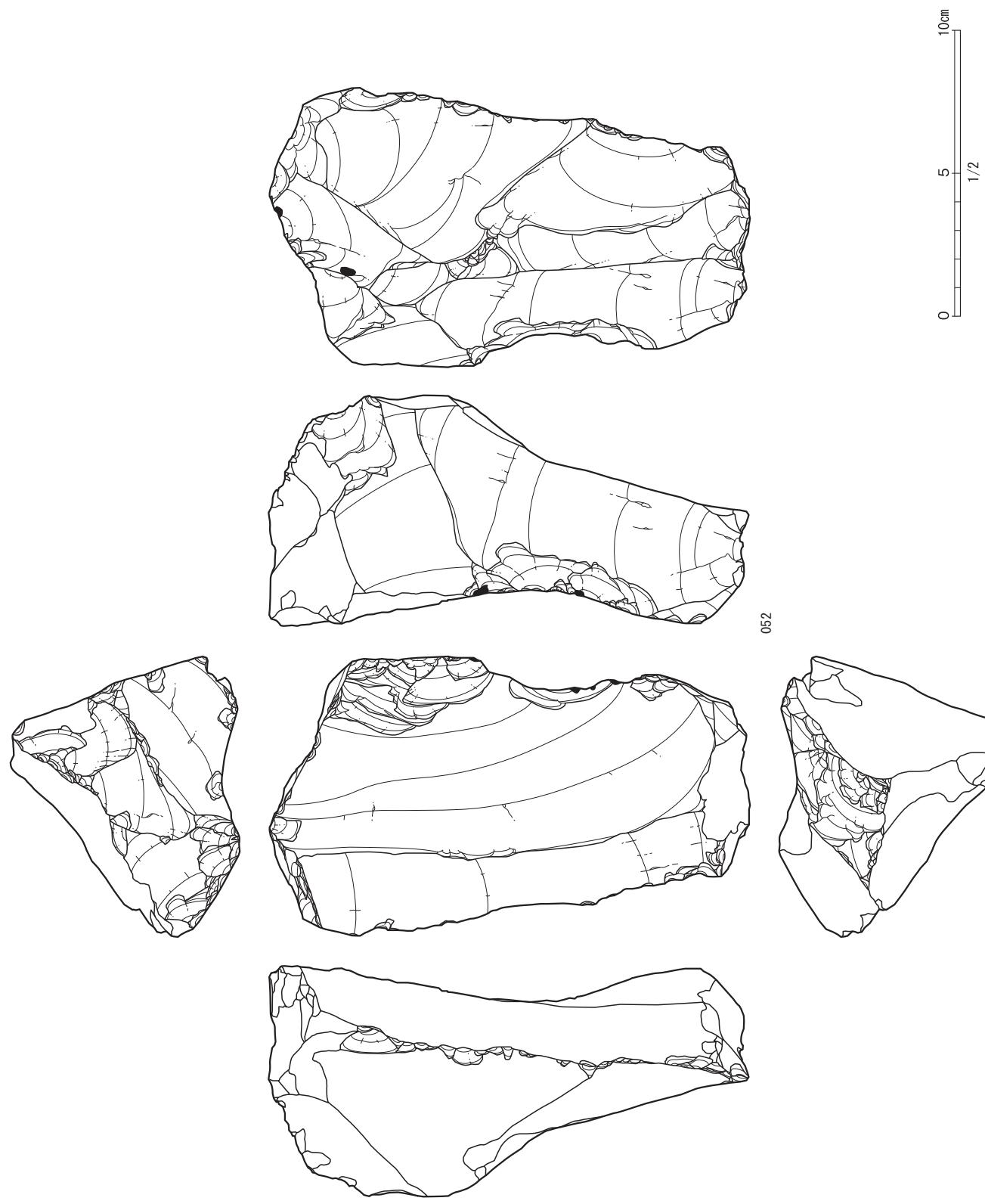
第24図 大林A遺跡出土石器⑪



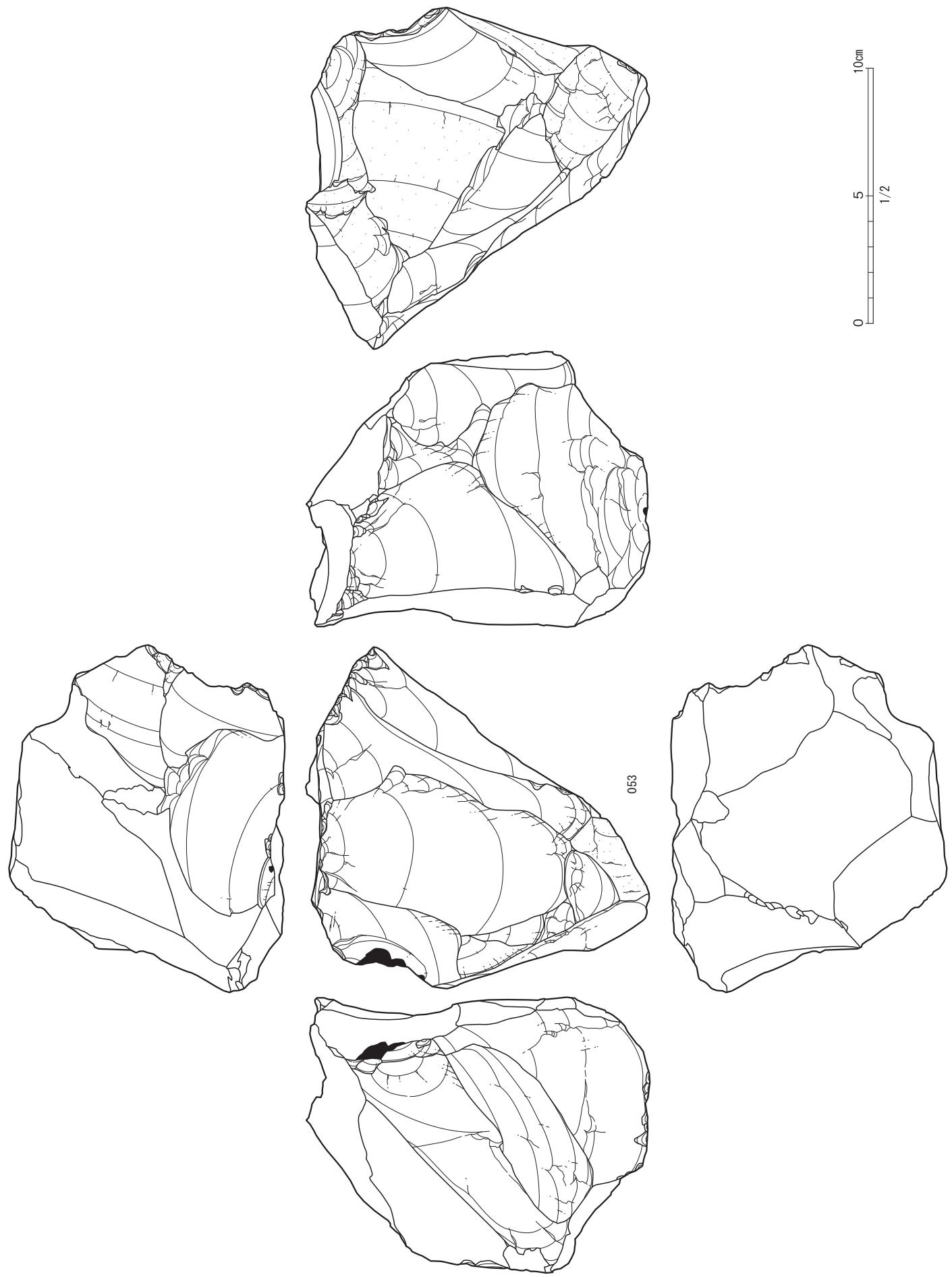
第25図 大林A遺跡出土石器⑩



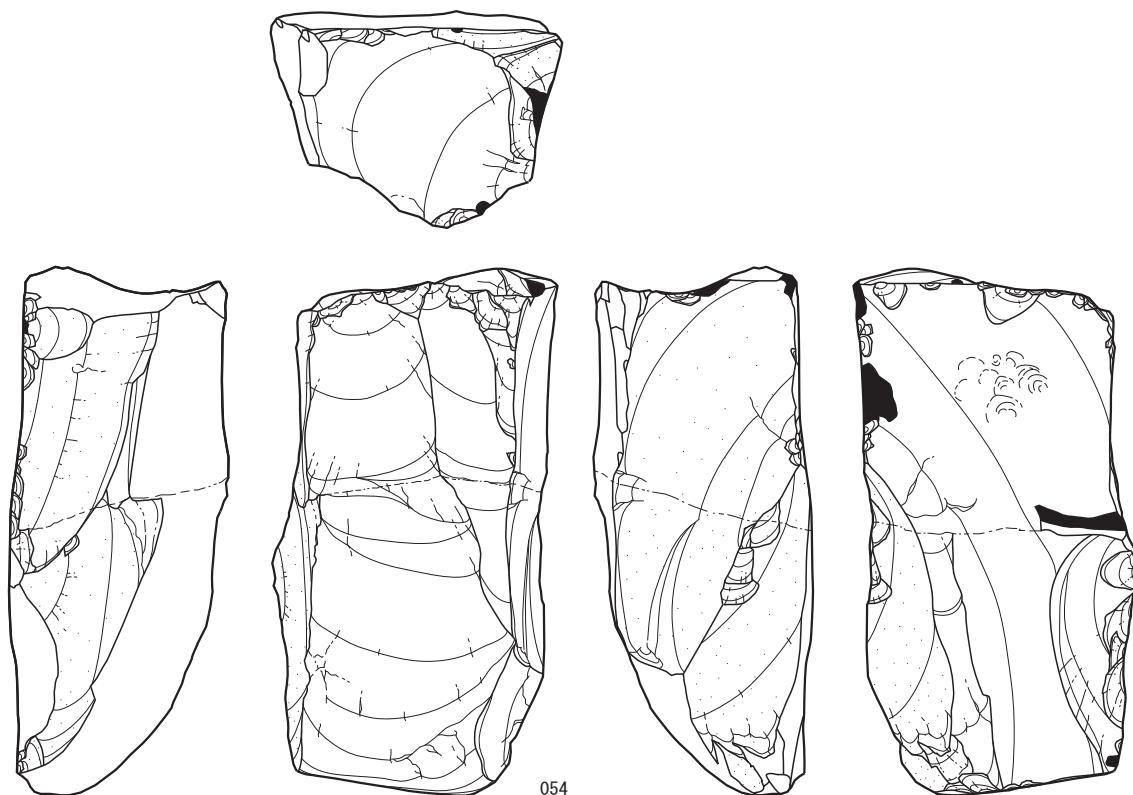
第26図 大林A遺跡出土石器⑩



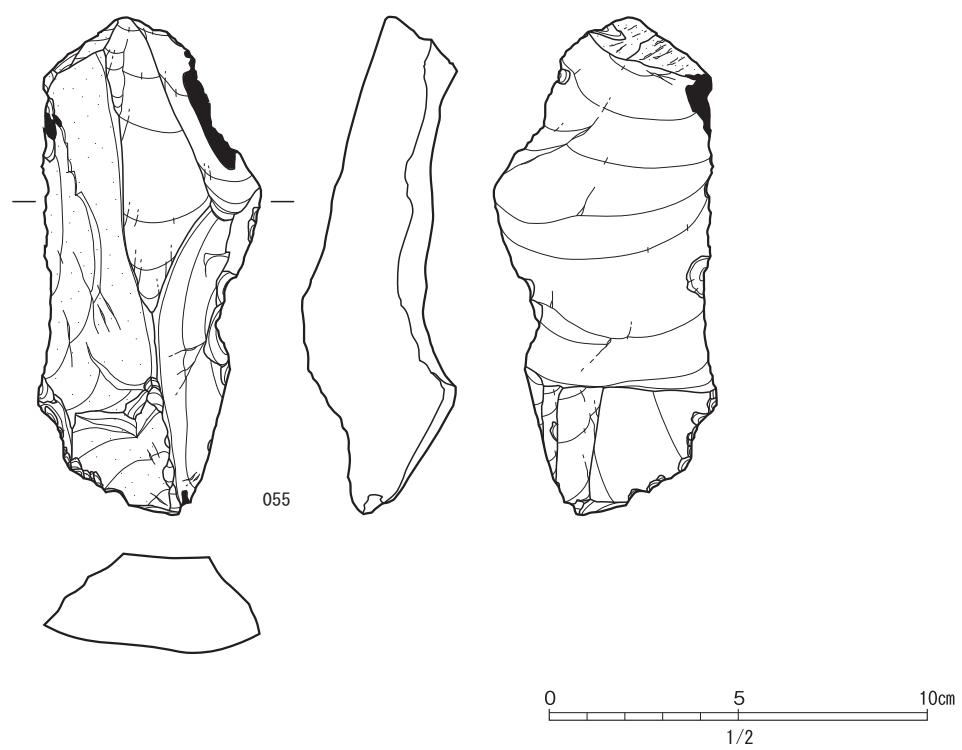
第27図 大林A遺跡出土石器⑩



第28図 大林A遺跡出土石器②



054



第29図 大林A遺跡出土石器②

#### 6) 接合資料（第29図～第31図・報告書遺物番号054～059）

054と055の接合資料は、角柱状の角礫を素材とした石核とそこから剥離された剥片である。上面に打面の作出を行い、正面作業面から石刃状の縦長剥片または幅広の縦長剥片を剥離する。今回出土した石核の中で、同一作業面から縦長剥片を複数枚剥離した好例である。裏面のやや上端寄りにコーンクラックが顕著に認められる。新たな分割により打面の作出を行おうとした痕跡であろうか。

056・057・058・059の接合資料は剥片剥離の様相を示す。剥離の順序としては、058と(056+057+059)がまず分割され、分割剥片(056+057+059)を石核とし、(056+059)→057の順に剥離が進行する。056は059を剥離した打撃の際に同時に剥落した可能性が高い。なお、057と059の打面は、058との分割面に相当する。剥片剥離で作出される剥片は、いずれも幅広で厚手の剥片である。大林遺跡における剥片剥離の一過程を示す資料である。

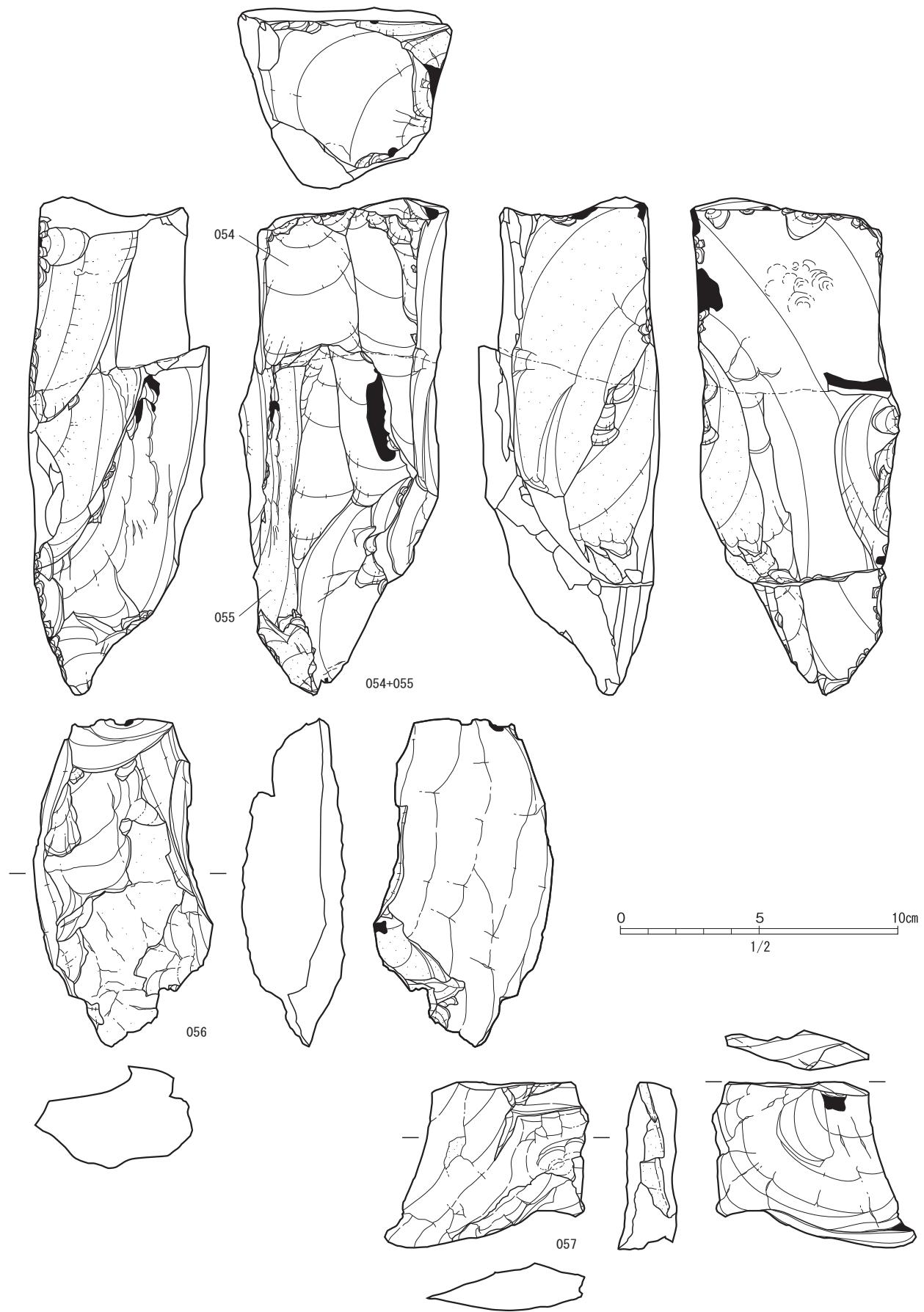
#### 7) 剥片剥離技術

大林遺跡では大量の剥片と碎片がこれまでの調査で出土する。そのため、剥片剥離と石器製作が大規模かつ継続的に行われていたことが推定される。

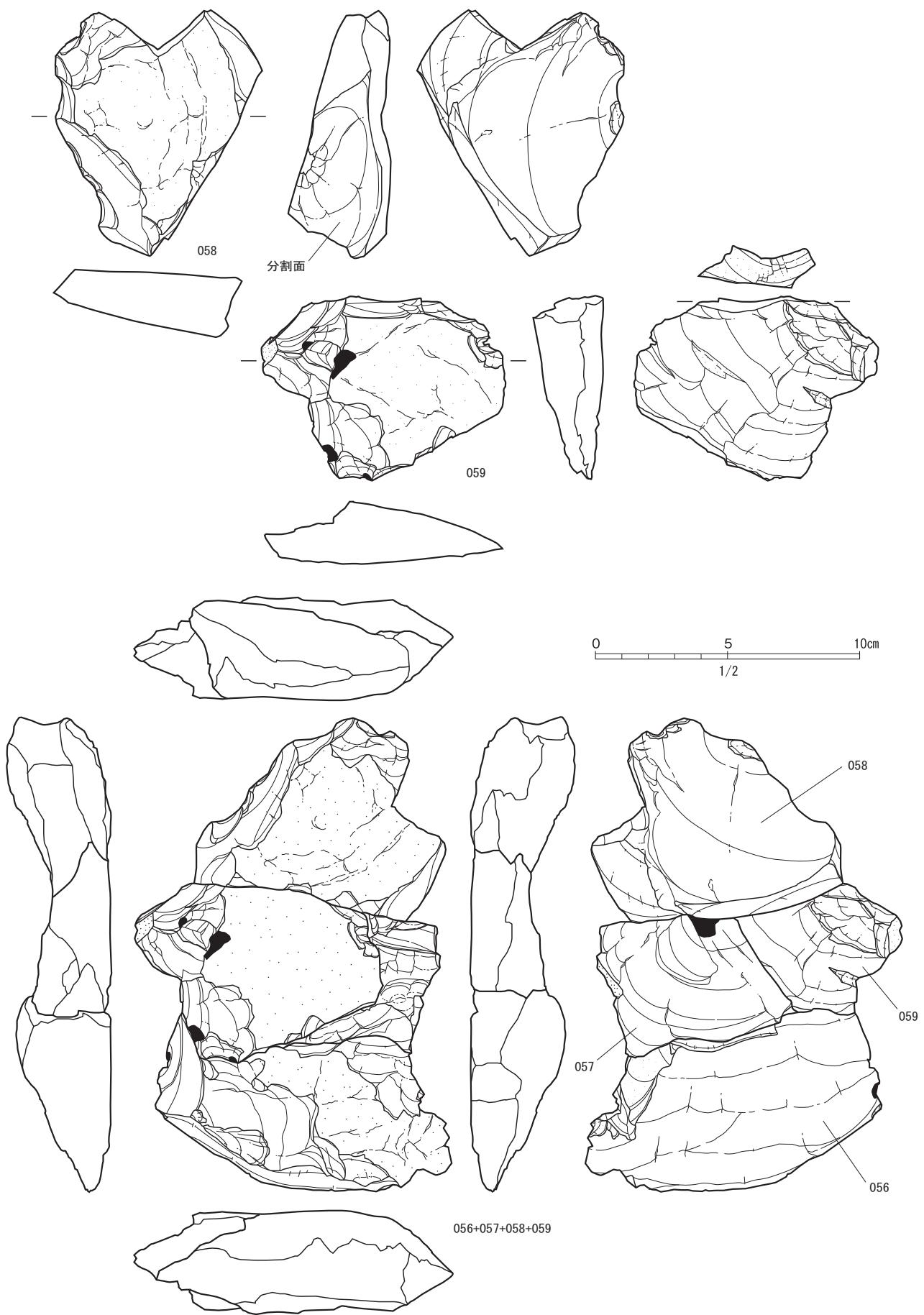
さて、出土したナイフ形石器等を見た場合、剥片剥離で作出される目的的剥片は、統一性がなく、縦長、幅広、横長の各種形状が認められ、かつ、剥片の厚みも薄手から厚手まで多様である。あくまで傾向ではあるが、石核第1類からは貝殻状の横長剥片を中心に作出され、同第2類からは縦長及び幅広の剥片を中心に作出されていることがわかる。

石核には、石核整形に伴って行われる打面（平坦面）の作出は見られるものの、打面再生が窺えるのは054のわずか1点で、細かな打面調整については認められなかった。そのあり方は、素材剥片や剥片の打面が礫打面と平坦打面で占められる特徴とも整合する。石核に作業面の移動が認められる場合、形成された平坦な剥離面を次の剥離の打面とする移動が多い。

つまり、大林A遺跡出土石器群の剥片剥離技法は、石核整形・石核再生の技術が複合した、薄く両側辺がほぼ並行する石刃を作出するような定まったものではない。石核再生の技術が多用されずに、多様な形状の剥片が作出される剥片剥離が行われていたと考えられる。



第30図 大林A遺跡出土石器②



第31図 大林A遺跡出土石器④

第2表 大林A遺跡出土遺物観察表①

挿図	報告書 実測図番号	器種名	細別分類	石材	遺物番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	備考
第8図	001	ナイフ形石器	第1類	下呂石	OBS0527	92.0	34.5	16.0	34.4	
第8図	002	ナイフ形石器	第1類	下呂石	OBS0762	64.5	33.0	16.0	25.3	
第8図	003	ナイフ形石器	第1類	下呂石	OBS0511	51.5	29.5	10.0	11.8	
第8図	004	ナイフ形石器	第1類	下呂石	OBS0484	43.0	29.5	12.0	10.7	
第9図	005	ナイフ形石器	第2類	下呂石	OBS0680	76.0	32.0	11.5	20.1	
第9図	006	ナイフ形石器	第2類	下呂石	OBS0444	44.0	34.0	11.0	10.2	
第9図	007	ナイフ形石器	第3類	下呂石	OBS0589	67.0	36.0	16.5	25.7	
第9図	008	ナイフ形石器	第3類	下呂石	OBS0716	69.0	31.5	14.0	30.1	
第10図	009	ナイフ形石器	第3類	下呂石	OBS0893	62.5	34.0	12.0	23.2	
第10図	010	ナイフ形石器	第3類	下呂石	OBS0345	97.0	42.0	21.0	58.5	
第11図	011	ナイフ形石器	第3類	下呂石	OBS0273	97.5	46.5	19.5	62.2	
第9図	012	ナイフ形石器	第3類	下呂石	OBS0759	49.0	30.5	14.0	16.4	
第10図	013	ナイフ形石器	第3類	下呂石	OBS0591	65.0	37.5	13.5	19.6	
第11図	014	ナイフ形石器	第4類	下呂石	OBS0526	90.0	41.5	19.5	51.7	
第11図	015	ナイフ形石器	第4類	下呂石	OBS0895	69.0	40.5	17.5	35.6	
第12図	016	ナイフ形石器	第4類	下呂石	OBS0839	66.5	38.5	14.5	21.1	
第12図	017	ナイフ形石器	第4類	下呂石	OBS0586	84.5	31.0	14.5	25.6	
第12図	018	ナイフ形石器	第4類	下呂石	OBS0420	92.5	49.0	22.5	91.3	
第13図	019	ナイフ形石器	第5類	下呂石	OBS0942	69.5	25.5	16.0	20.7	
第13図	020	類角錐状石器		下呂石	OBS0784	57.5	30.0	14.0	16.9	
第13図	021	類角錐状石器		下呂石	OBS0653	65.0	41.0	21.5	43.1	
第13図	022	削器	第1類	下呂石	OBS0012	78.6	35.7	20.0	43.3	
第14図	023	削器	第1類	下呂石	OBS0604	109.0	47.0	31.0	94.9	
第14図	024	削器	第2類	下呂石	OBS0058	93.0	58.5	15.0	56.6	
第15図	025	削器	第2類	下呂石	OBS0321	61.5	53.0	14.0	29.9	
第15図	026	削器	第2類	下呂石	OBS0822	67.0	77.0	19.0	74.9	
第15図	027	削器	第3類	下呂石	OBS0710	55.0	87.5	21.5	74.9	
第16図	028	削器	第3類	下呂石	OBS0219	94.5	65.5	21.5	141.7	
第16図	029	撃器		下呂石	OBS0079	72.8	34.2	20.0	42.0	
第16図	030	撃器		下呂石	OBS0046	42.0	42.5	8.5	19.5	
第16図	031	撃器		下呂石	OBS0070	45.5	40.0	18.0	26.5	
第17図	032	石核	第1類	下呂石	OBS0878	126.0	85.5	40.0	295.0	
第17図	033	石核	第1類	下呂石	OBS0526	102.0	77.5	42.5	255.0	
第17図	034	石核	第1類	下呂石	OBS0699	95.0	76.0	32.0	208.0	
第18図	035	石核	第1類	下呂石	OBS0381	69.5	81.4	27.0	120.9	
第18図	036	石核	第1類	下呂石	OBS0526	47.1	81.1	34.6	110.0	
第18図	037	石核	第1類	下呂石	OBS0378	72.0	93.5	38.0	197.0	
第19図	038	石核	第1類	下呂石	OBS0659	88.3	68.2	39.9	211.0	
第19図	039	石核	第1類	下呂石	OBS0588	67.5	95.5	35.5	159.9	
第19図	040	石核	第1類	下呂石	OBS0526	90.5	60.7	34.0	125.0	
第20図	041	石核	第1類	下呂石	OBS0346	63.3	99.1	42.3	185.1	
第20図	042	石核	第1類	下呂石	OBS0637	98.5	75.5	46.5	249.0	
第21図	043	石核	第1類	下呂石	OBS0375	127.0	122.8	41.1	662.0	
第21図	044	石核	第1類	下呂石	OBS0308	112.8	69.6	43.3	256.0	
第22図	045	石核	第1類	下呂石	OBS0295	108.0	76.7	28.4	199.1	
第22図	046	石核	第2類	下呂石	OBS0432	104.4	69.7	73.3	383.0	
第23図	047	石核	第2類	下呂石	OBS0107	89.0	99.4	51.3	360.0	
第23図	048	石核	第2類	下呂石	OBS0815	101.5	84.5	68.0	414.0	
第24図	049	石核	第2類	下呂石	OBS0457	110.0	124.9	75.8	980.0	
第25図	050	石核	第2類	下呂石	OBS0424	112.9	96.6	80.8	591.0	
第26図	051	石核	第2類	下呂石	OBS0514	112.0	122.0	75.0	629.0	
第27図	052	石核	第2類	下呂石	OBS0428	169.3	98.6	79.3	912.0	
第28図	053	石核	第2類	下呂石	OBS0304	136.8	134.7	108.4	1458.0	
第29図	054	石核		下呂石	OBS0548	139.2	74.7	57.4	687.0	
第29図	055	剥片		下呂石	OBS0548	126.8	60.0	23.3	214.0	
第30図	054+055	剥片接合資料		—	—	179.2	74.7	64.4	901.0	
第30図	056	剥片		下呂石	OBS0318	118.5	64.5	36.5	232.0	
第30図	057	剥片		下呂石	OBS0380	93.5	79.0	26.0	184.0	
第31図	058	剥片		下呂石	OBS0558	61.0	74.0	17.0	72.7	
第31図	059	剥片		下呂石	OBS0384	70.0	93.0	24.0	118.2	
第31図	056+057+058+059	剥片接合資料		—	—	180.2	119.9	47.6	606.9	

























## 第4章 総括

### 第1節 出土石器群の年代的な位置づけについて

年代的な位置づけの準備作業として、岐阜県内及び隣接県のナイフ形石器を中心とする編年を概観する。

岐阜県・愛知県内では特に岐阜市日野1・寺田・椿洞の各遺跡で、大林A遺跡と対比すべき石器群が出土した。まず始めに、沢田伊一郎・長屋幸二・西村勝広・齋藤基生の各氏編年案を整理する。

沢田氏は岐阜県の後期旧石器時代を第Ⅰ段階から第Ⅴ段階の5段階に区分し、その後の編年研究の方向性を確立した（沢田 1996a, b）。今回の発掘調査出土品と関わりのあるところでは、第Ⅲ段階を国府型ナイフ形石器・切出形ナイフ形石器・角錐状石器に特徴づけられる段階とし、次の長屋氏の指摘を受けて、第Ⅲ段階は前半の日野段階と後半の寺田・椿洞段階の2段階に細分できるとした。

長屋氏は、横長剥片の剥片剥離作業のあり方から、岐阜市の日野1・寺田・椿洞の各遺跡の石器群に時間差を見出し、「日野段階」と「寺田・椿洞段階」を設定した（長屋 1995）。長屋氏の「日野段階」は、瀬戸内技法が明瞭であり、またナイフ形石器は一側刃加工主体という特徴の他、横長剥片素材と縦長剥片素材の両方が認められるという。一方で「寺田・椿洞段階」は、日野段階と大きく異なる点として瀬戸内技法が認められない点、角錐状石器が確実に組成する点の二点を挙げた。寺田遺跡では二側刃加工のナイフ形石器が比較的明瞭だが、椿洞遺跡ではそれは少数派といった違いが認められるが、長屋氏は寺田・椿洞各遺跡の共通性を重視し、時間差のある石器群とはしなかった。

西村氏は濃尾平野北部の旧石器時代編年を発表し（西村 1999, 2003, 2005）、第Ⅰ期は台形様石器と刃部磨製石斧を伴う段階、第Ⅱ期は椿洞遺跡最下層出土石器群（椿洞KⅢ期、堀・橋詰 1989）を充てる。西村氏は、縦長剥片素材の両側刃に加工したナイフ形石器を第Ⅱ期の特徴としてまず挙げ、切出形と部分加工のナイフ形石器が伴うことを指摘した。第Ⅲ期は瀬戸内技法の影響下にある石器群が確認できる段階で、一方で角錐状石器が目立つと指摘する。西村氏は、長屋氏が時間差と理解する寺田K2期と日野K段階は同じ石器群であると理解し、見解の相違に触れる。そして、同じく第Ⅲ期の椿洞遺跡KⅡ期は、先の石器群より一層横長剥片剥離技術を駆使したナイフ形石器主体の石器群へと変化するとした。第Ⅳ期は、縦長剥片素材の二側刃加工ナイフ形石器が盛行し、片面加工・両面加工の槍先形尖頭器が伴う場合があるとした。

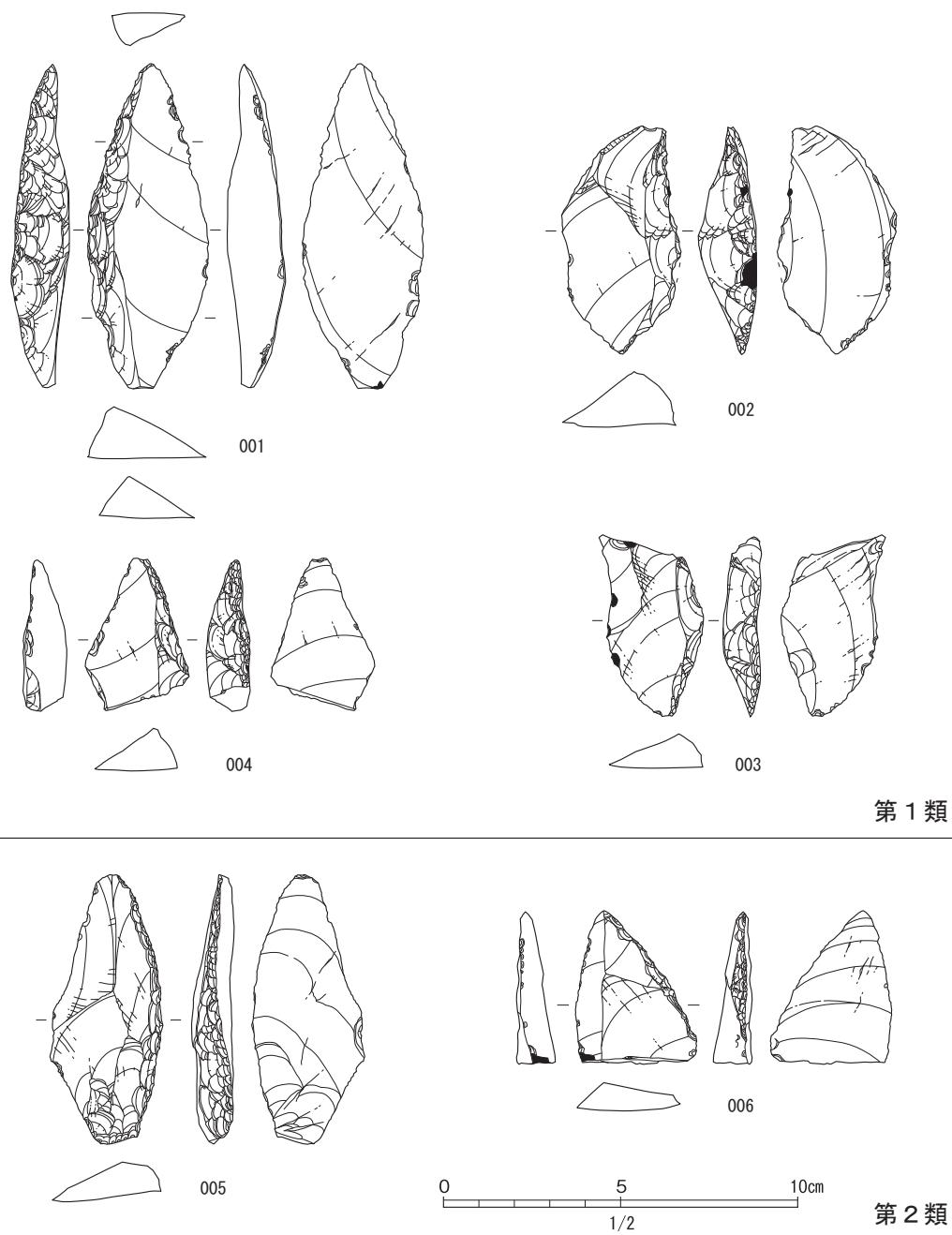
齋藤氏は愛知県内の編年（齋藤 2002, 2003）を示し、Ⅰ期とⅡ期をAT降灰以前に位置づける。Ⅰ期は平坦剥離が施される台形様石器と刃部磨製石斧が特徴的な段階で、Ⅱ期は石刃技法によるナイフ形石器を主体とする段階である。Ⅲ期は、瀬戸内技法の影響下にあるナイフ形石器主体の段階で、角錐状石器等が伴う。Ⅳ期は縦長剥片素材と二側刃加工を特徴とする茂呂型ナイフ形石器が主体になる段階である。西村氏と齋藤氏の編年を見ると、岐阜・愛知の濃尾平野一帯では、概ね同内容で石器群が変遷していることがわかる。

次に、今回の発掘調査で出土した大林A遺跡の石器群の年代的な位置づけを、各氏の編年を参考にしながら検討する。

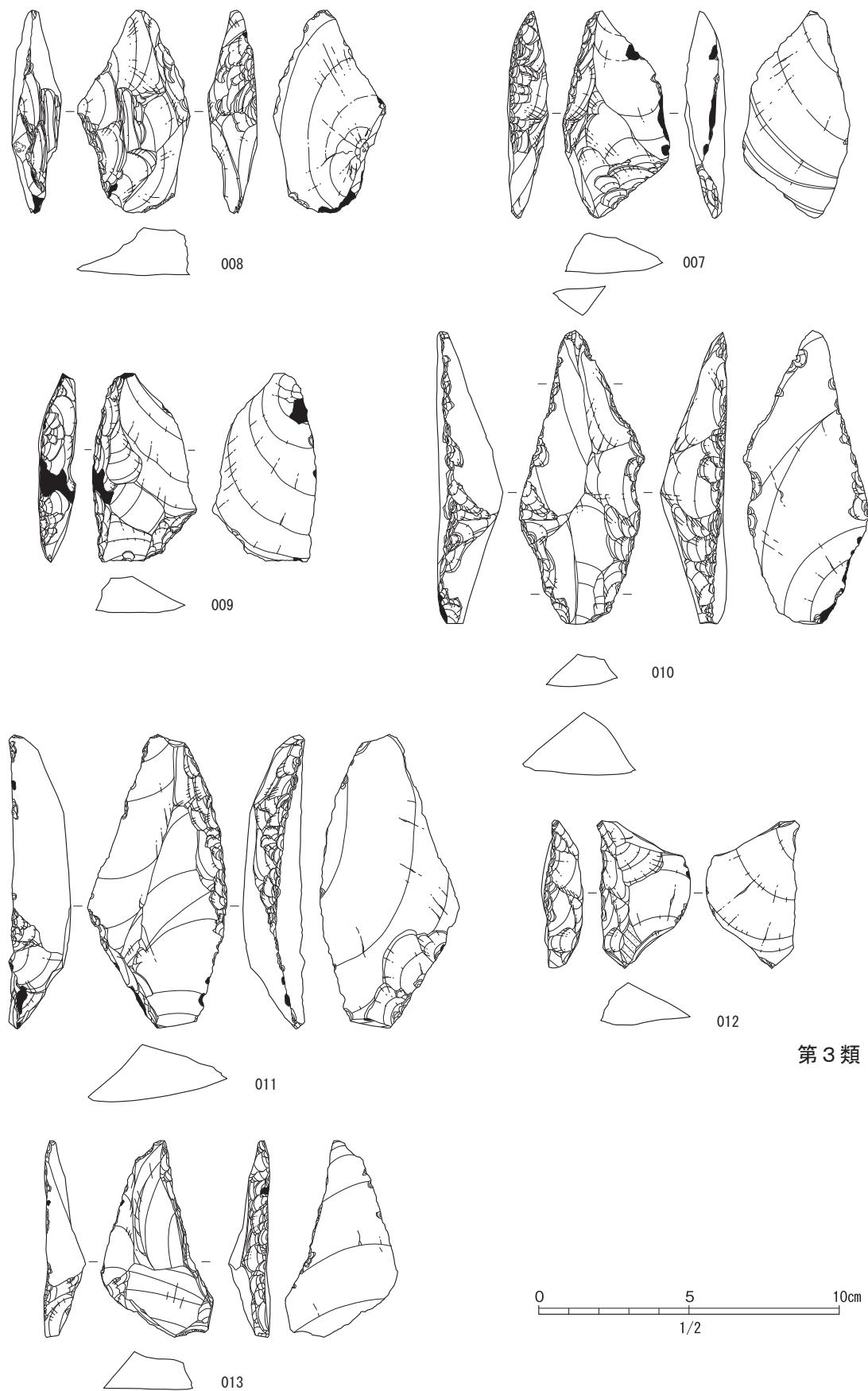
今回の発掘調査で出土した石器群の特徴は、①ナイフ形石器に偏る器種組成であること、②縦長・

横長・幅広不定形といった素材剥片を用い、一側辺・二側辺・部分加工・切出形のナイフ形石器を作りだし、石器の厚みも薄手から厚手まで多様であること、③成形加工では、素材形状を大きく変形させること、④石刃技法や瀬戸内技法の明確な存在は確認できず、また剥片剥離途上中の打面再生と打面調整もほとんど認められない。そして、並行剥離と交互剥離による求心状剥離の一群と、平坦面をねらいながら $90^{\circ}$ に作業面を移動する剥片剥離の一群を特徴とする点の4つを挙げることができる。

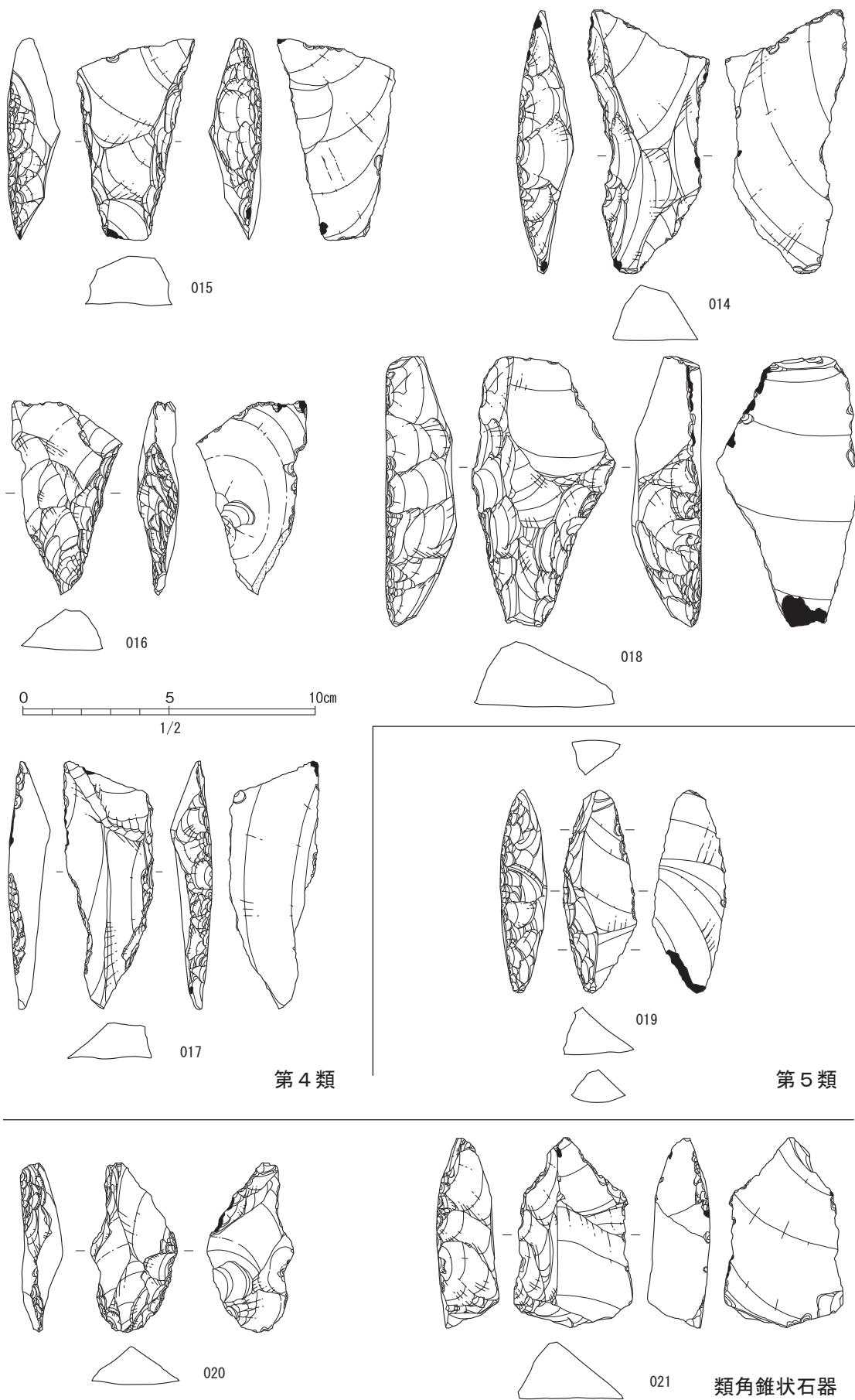
その大林A遺跡出土石器群の特徴を先の編年案と対比した場合、西村氏の「第Ⅲ期」との共通点が



第32図 大林A遺跡ナイフ形石器第1類・第2類



第33図 大林A遺跡ナイフ形石器第3類



第34図 大林A遺跡ナイフ形石器第4類・第5類・類角錐状石器

多い。西村氏が指摘する第Ⅲ期の特徴の一つ、「瀬戸内技法」の存在またはその影響という点では、今回出土した大林A遺跡出土のナイフ形石器のうち、第1類とした001などは一側刃加工のナイフ形石器で、国府型ナイフ形石器の影響が想定される一群である。

なお、瀬戸内技法に明らかに関連する石器は今回の発掘調査では出土しなかったが、また、過去に大林A遺跡一帯で表採された石器群の中に、盤状剥片・盤状石核・翼状剥片が認められるため（飛騨考古学会旧石器分科会 1995; 井上 2001）、程度の多少はあるにせよ、多くの研究者が指定するように、大林遺跡に瀬戸内技法の影響及んでいたことは疑いようもない。

また、西村氏が第Ⅲ期のもう一つの特徴として指摘した（西村 2005:p. 12）、日野遺跡を代表例とした出土幅に対して厚みのあるナイフ形石器は、第5類の019が該当しようか。背面の稜が明瞭な縦長剥片の一側刃に急角度剥離を行い、結果、幅と厚さが同等に近いナイフ形石器になる。ただし、西村氏が指摘するような基部への入念な加工は、基部が欠損するため確認できない。

一方で今回の大林A遺跡の発掘調査では明確な角錐状石器は出土しなかった。その類似品である021は剥離で尖頭部を作り出す行為が明確であるが、基部側を欠損し、判然としない。大林A遺跡での角錐状石器の存否の確認は、編年的位置づけにも重要な材料になるため、今後の課題である。

さて、永塚俊司氏が大林遺跡A地点出土ナイフ形石器の一つの特徴と指摘する「縦長または不定形な素材剥片を用い、打面の相対する縁辺に急角度調整を施したナイフ形石器」（永塚 2011）が今回出土した。第3類としたナイフ形石器で、007・008がその代表例である。このように、大林A遺跡出土のナイフ形石器は、実に多様な形態から構成されていることがわかる。

では、本報告にて分類した第1類から第5類のナイフ形石器は、同一時期のものとして考えることができるだろうか。現在の段階では、西村氏の第Ⅱ期、あるいは第Ⅳ期の石器群が含まれないとは断言できないが、一つの段階が多様な形態のナイフ形石器で構成されるあり方を、湯ヶ峰を中心とする下呂石原産地周辺遺跡の特徴と考えられる。

その理由の一つに、初矢遺跡でも大林A遺跡のようなナイフ形石器の構成が確認できるからである。鈴木忠司・片田良一の両氏が報告した下呂市初矢遺跡（鈴木・片田 1979）は大林遺跡群から南方へ約4km離れた場所にある、現下呂市内で初めて発見された旧石器時代遺跡として記念碑的な遺跡でもある。同遺跡では、初矢遺跡を著名にした国府型ナイフ形石器の他、今回分類の第1類・第2類・第3類のナイフ形石器が確認できる。初矢遺跡でも、ナイフ形石器の構成は多様である。

このように、今回発掘調査で出土したナイフ形石器を主体とする石器群は、まだ仮説の域は脱しきれないが、西村氏の第Ⅲ期に併行する段階の石器群と考えられる。なお、本段階を各地域の旧石器時代編年と対比させた場合、長野県の野尻湖編年（谷 2007）の第Ⅲ期、武藏野台地のIV層下部・V層段階、相模野編年（諏訪間 2001）の段階Vと接点をもつと考えられる。

## 第2節 大林遺跡群における大林A遺跡の位置づけ

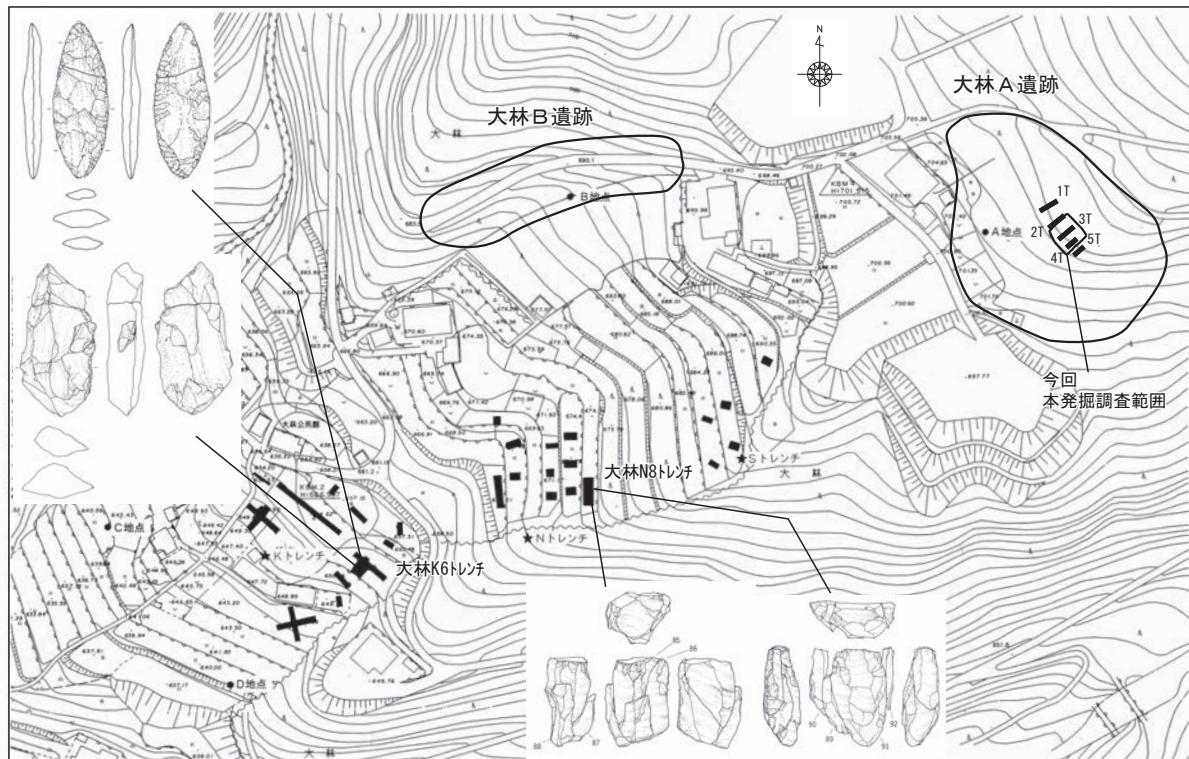
これまでの調査で判明した大林遺跡群の各遺跡（地点）の様相は吉朝則富氏（吉朝 2005b）により簡潔にまとめられているため、吉朝氏の指摘以後に判明したことを中心に述べたい。

大林遺跡群は、大局的には、国府型ナイフ形石器を含むナイフ形石器群を出土する大林A遺跡（飛騨考古学会 1995; 吉朝 2005b）、石刃技法の一群を出土するナイフ形石器後半期の石器群を出土する大林遺跡N8 トレンチ地点（吉田 2002）、尖頭器石器群を中心に出土する大林C・D遺跡（吉田 2002 の K6 トレンチ含む）にまとまる傾向にある。細石刃石器群は、N トレンチ・K トレンチから出土しており、現時点では地点的に偏在性は読み取れない。また、長野県伊那市神子柴遺跡出土の下呂石製大形（神子柴型）尖頭器の製作地点も現在では定かではない。

数千点の出土・採集が確認されている大林A遺跡では、尖頭器石器群の出土がこれまでわずか2点（井上 2001）と限定的であり、今回の発掘調査では尖頭器石器群の出土は確認できなかった。

そのため、標高 700m 付近で大林遺跡群最古の石器群でもあるナイフ形石器群の石器製作跡、標高 670m 付近ではナイフ形石器後半期の石器製作跡、標高 650m 付近では尖頭器石器群製作跡と、緩斜面上の標高の高い場所から低い場所に順に新しい時期の石器群が検出される傾向にある。つまり、大林遺跡群は、旧石器時代の各段階に製作される石器群の累積の結果、形成された遺跡群であると言える。

今回の発掘調査で、武藏野台地IV層下部からV層に接点をもつ石器群が出土したことから、今のところ大林遺跡群最古の石器群は始良 Tn 火山灰（AT）降灰以降に年代的に位置づけられる。湯ヶ峰南麓の初矢遺跡も今回の発掘調査で出土した石器群と同じ年代に位置づけられる。今までのところ確認できている湯ヶ峰一帯の旧石器時代遺跡は、AT 降灰以降の遺跡である。その年代は、較正年代で 28,000 年から 25,000 年前と推定される。それ以前にさかのぼる遺跡の発見は、大林遺跡群の歴史的評価に関わる大きな課題である。



第35図 大林遺跡群と発掘調査地点の概要

### 参考・引用文献

- 井上雅善 2001 「下呂町大林の旧石器資料」『飛騨と考古学』Ⅱ、旧石器特集号、66-69 頁、飛騨考古学会。
- 岩田修・石原哲彌 1988 「湯ヶ峰ディサイトと石器」『20億年のドラマー飛騨の大地をさぐるー』61-73 頁、教育出版文化協会。
- 岩田修 1995 「湯ヶ峰流紋岩と下呂石」『飛騨と考古学』、295-308 頁、飛騨考古学会。
- 旧石器文化談話会編 2000 『旧石器考古学辞典』
- 工藤雄一郎 2010 「旧石器時代研究における年代・古環境論」『講座日本の考古学1、旧石器時代(上)』、124-155 頁、青木書店。
- 齋藤基生 2002 「第4節 時期区分・編年表」『愛知県史』資料編1、考古1(旧石器・縄文)、30-31 頁。
- 齋藤基生 2003 「愛知県内における後期旧石器の変遷」『東海石器研究』第1号、4-5 頁。
- 沢田伊一郎 1994 「岐阜県における瀬戸内技法の様相(1)」『旧石器考古学』第49号、65-71 頁。
- 沢田伊一郎 1996a 「岐阜県における瀬戸内技法の様相(2)」『旧石器考古学』第52号、49-64 頁。
- 沢田伊一郎 1996b 「岐阜県における瀬戸内技法の様相(3)」『旧石器考古学』第53号、83-96 頁。
- 鈴木忠司・片田良一 1979 「初矢遺跡採集のナイフ形石器」『岐阜県考古』第7号、1-7 頁、岐阜県考古学会。
- 鈴木次郎・矢島國雄 1988 「先土器時代石器群とその編年」『新版日本考古学を学ぶ』第1巻、154-182 頁。
- 須藤隆司 2006 「中部地方の地域編年」『旧石器時代の地域的編年研究』、105-135 頁、同成社。
- 諏訪間順 2001 「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』、平成12年度神奈川県考古学会考古学講座、1-20 頁。
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』、言叢社。
- 竹岡俊樹 2003 『旧石器時代の型式学』、学生社。
- 谷和隆・大竹憲昭 2003 「野尻湖遺跡群における石器文化の変遷」『野尻湖遺跡群の旧石器編年』、第15回長野県旧石器文化研究交流会シンポジウム、23-63 頁。
- 谷和隆 2007 「野尻湖遺跡群における先土器時代石器群の変遷」『長野県立歴史館研究紀要』第13号、3-21 頁。
- 永塚俊司 2011 「大林遺跡A地点採集のナイフ形石器」『第4回下呂石シンポジウム2011』、73-74 頁、下呂石シンポジウム実行委員会。
- 堀正人・橋詰佳治 1989 『椿洞遺跡』、岐阜市教育委員会。
- 長野県埋蔵文化センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書15—信濃町内その1—』
- 長屋幸二 1995 「濃尾平野北部における横長剥片剥離技術—岐阜市内3遺跡の再検討—」『旧石器考古学』第50号、47-54 頁。
- 長屋幸二 2011 「東海西部地域の角錐状石器」『九州旧石器』第15号、129-134 頁、九州旧石器文化研究会。
- 西村勝広 1999 「濃尾平野北部における旧石器時代の石器編年—調査・研究の到達点—」『岐阜史学』第96号、1-20 頁、岐阜史学会。
- 西村勝広 2003 「濃尾平野北部の旧石器編年」『東海石器研究』第1号、8-9 頁。
- 西村勝広 2005 「編年案」『東海石器研究』第3号、10-13 頁。
- 飛騨考古学会旧石器分科会 1995 「飛騨・湯ヶ峰山麓の旧石器資料」『飛騨と考古学』、255-267 頁。
- 堀正人・橋詰佳治 1989 『椿洞遺跡』、岐阜市教育委員会。
- 麻柄一志 2005 「剥片剥離技術と石材」『旧石器考古学』第58号、87-88 頁。
- 三浦知徳 2011 「北陸地方における旧石器の系統と編年」『考古学ジャーナル』No.610、15-24 頁。
- 森先一貴 2011 「国府系石器群の多様性」『旧石器考古学』第74号、49-60 頁。
- 吉朝則富 1999 「(速報)飛騨湯ヶ峰下呂石原産地における大型尖頭器製作址について」『長野県考古学会誌』第89号、68-69 頁。
- 吉朝則富 2005a 「下呂大林A地点立会調査」『どっこいし』第79号、1-1 頁。
- 吉朝則富 2005b 「岐阜県湯ヶ峰下呂石原産地」『旧石器考古学』第67号、57-65 頁。
- 吉朝則富 2008 「飛騨の旧石器文化—現状と課題」『平成18年度・平成19年度光記念館研究紀要・自然科学』第5号
- 吉田英敏編 1987 『寺田・日野1遺跡』、岐阜市教育委員会。
- 吉田英敏 2002 『大林遺跡試掘調査報告書』、下呂町教育委員会。



# 写 真 図 版





発掘開始時



南東部調査区掘削中



南東部調査地山掘削



北西部調査区 A-A' 面



南東部調査区 A-A' 面



北西部調査区 A-A' 面拡大



北西部調査区 B-B' 面



北西部調査区 B-B' 面拡大

図版 2



北西部調査区掘削①



北西部調査区掘削②



北西部調査区掘削③



南東部調査区遺物出土状況



北西部調査区遺物出土状況①



北西部調査区遺物出土状況②



北西部調査区遺物出土状況③



北西部調査区遺物出土状況④



南東部調査区完了①



南東部調査区完了②



南東部調査区完了③



北西部調査区完了①



北西部調査区完了②



発掘調査区埋戻し作業



発掘調査区埋戻し完了



出土遺物指導風景



001



002



003



004



005



006



001



002



003



004



005



006

出土石器①裏

図版 6



008



007



009



010



011



013



012

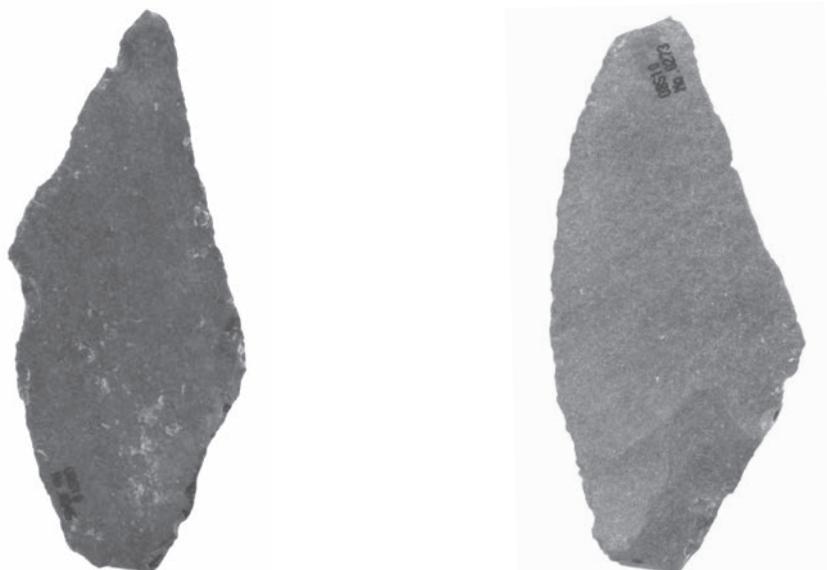
出土石器②表



008

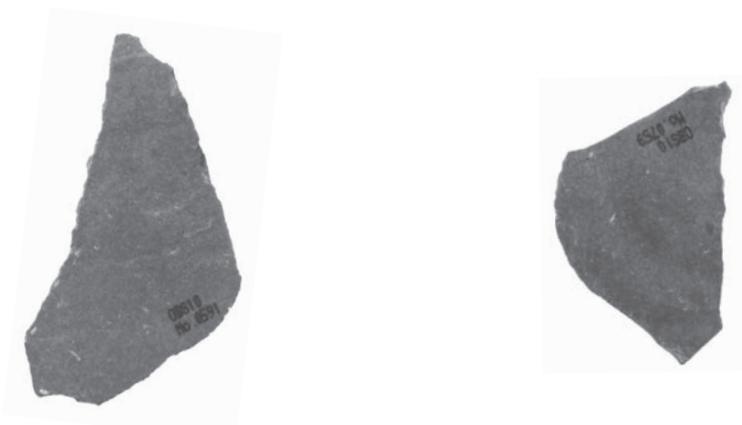
007

009



010

011



013

012

出土石器②裏

図版 8



015



014



017



018



016



019

出土石器③表



015



014



017



018



016



019

出土石器③裏

図版 10



020



021



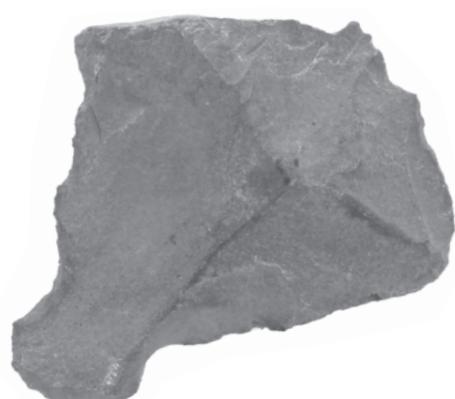
022



023



024



026

出土石器④表



020



021



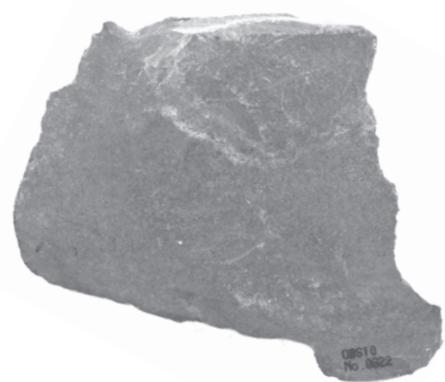
022



023



024



026

出土石器④裏

図版 12



025



027



028



029



030



031

出土石器⑤表



025



027



028



029



030



031

出土石器⑤裏

図版 14



032



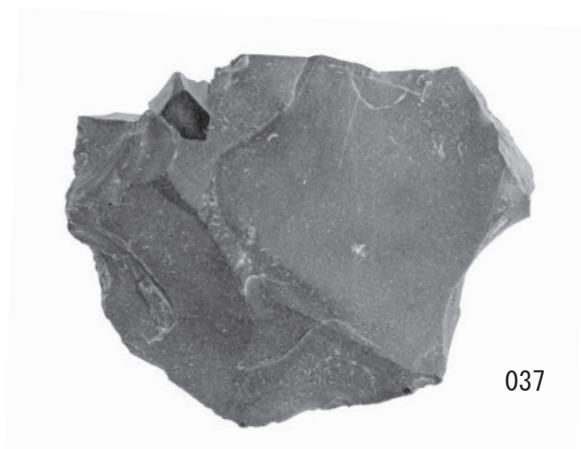
033



034



035

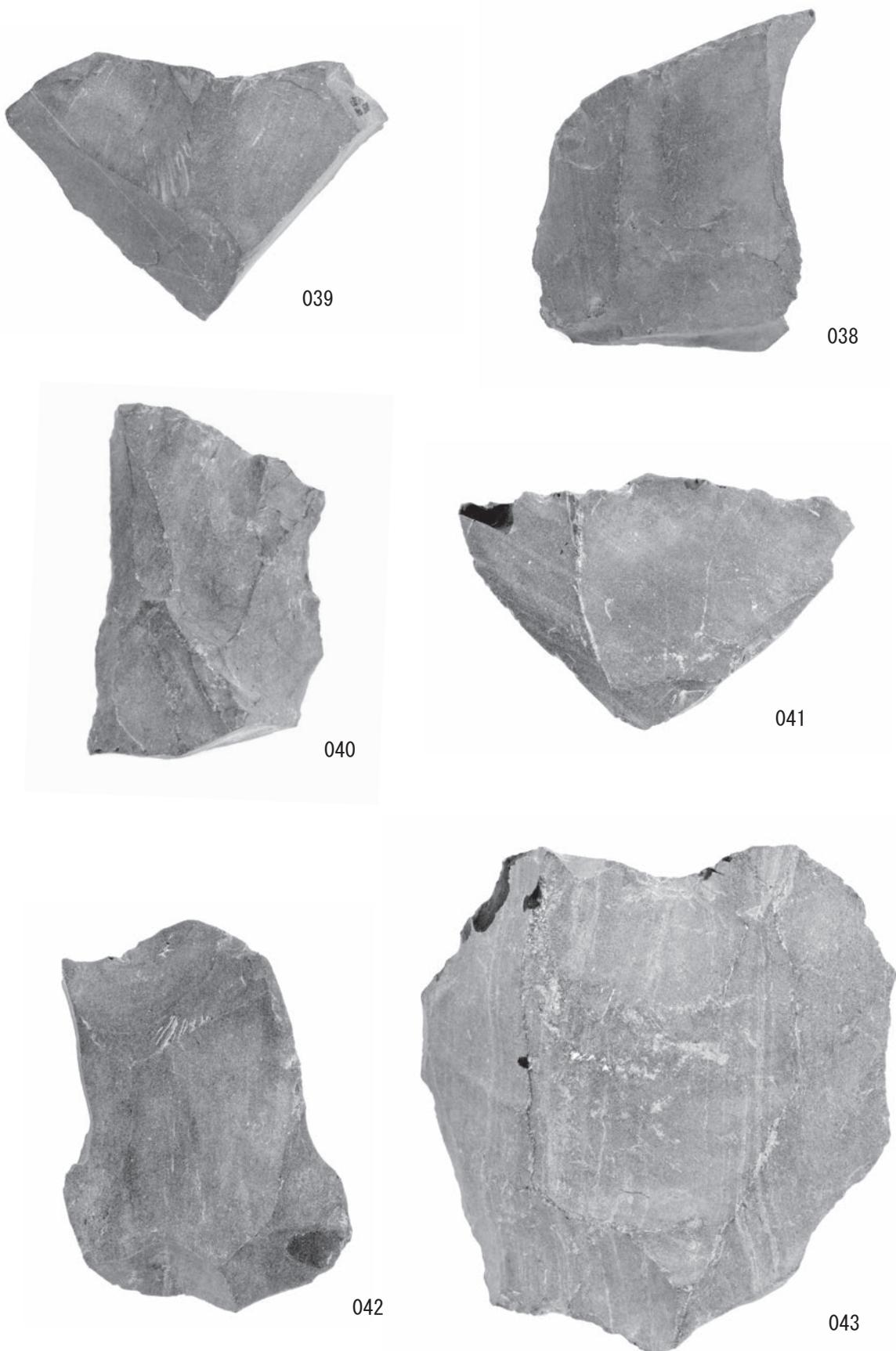


037



036

出土石器⑥



出土石器⑦

図版 16



044



045



046



047



049

出土石器⑧



050



051



048



052



053

出土石器⑨

図版 18



出土石器⑩

## 報告書抄録

2015年2月20日発行

下呂市文化財調査報告書第5集

# 大林A遺跡発掘調査報告書

編集・発行 下呂市教育委員会

〒509-2517 岐阜県下呂市萩原町萩原1166番地8

電話 0576-52-2900

印刷・製本 株式会社金山印刷所

